平成 15 年度　愛知県地域づくり協働支援事業

私たちがデザインする地域づくり

地域再生起業プランセミナー報告書

発行　　愛　知　県

編集　特定非営利活動法人 地域福祉サポートちた

はじめに

近年、社会環境の変化に伴い、地域を取り巻く環境や問題は複雑・多様化しており、行政が地域づくりを主導する手法は限界を見せております。

そうした変化に対応した地域づくりを進めるにあたっては、住民や行政、地域づくり活動関係者、事業者等のそれぞれが、主体性を持って地域づくりに取り組むとともに、地域づくりの担い手として、課題を解決する能力を身につけることが求められております。

そのためには、それぞれの主体が対等な立場で参加し、得意分野を活かしながら、相互に連携して地域づくりを実践する必要がありますが、現状では、その動きは十分なものとは言えません。

本県では、平成 15 年度事業として、地域住民、地域づくり活動関係者、行政職員等が一堂に会する場を提供することにより、協働による地域づくり活動を実践し、新たな地域づくりのための仕組みづくりと人づくりを推進することを目的とした「地域づくり協働支援事業」を実施いたしました。

今回、知多市の地域課題である「地域社会貢献事業の開発による地域コミュニティの活性化」をテーマとし、本事業を「特定非営利活動法人地域福祉サポートちた」に委託し、「地域再生起業プランセミナー」を開催してまいりました。これは、地域のあり方をコミュニティビジネスの可能性から考えようとするものであります。

本事業の実施により、セミナー参加者の問題解決能力が向上し、自立的な地域社会の構築が促進されるとともに、本事業が他のモデルとなり、市町村における地域振興方策を進める際の参考にしていただければ幸いと考えております。

最後に、受託者として御協力いただいた、「特定非営利活動法人地域福祉サポートちた」関係者及びセミナー参加者に感謝申し上げます。

平成 16 年 3 月

愛知県企画振興部地域振興課

セミナー開講に寄せて

最近「NPO*」という言葉が多く語られるようになり、「NPO」にいろいろな期待が寄せられています。この「地域再生起業プランセミナー」が開催される「NPO・ボランティア情報ひろば」は、「NPO」を支援するための場所であり、またここから「NPO」で活動する仲間たちを生み出したり、あるいは育ちあっていくための拠点でもあります。ここは知多市が市民活動を支援する団体を公募し、私たち特定非営利活動法人地域福祉サポートちた（以下、サポートちた）が選ばれ、「NPO・ボランティア情報ひろば」として市民の皆さんに提供し、私たちもここを活動の場として使わせていただいているところです。市の建物ではありますが、管理運営は私たちが自主的に行っています。

そんな私たちが、地域再生というテーマの事業を運営することには、大きな意味があると思います。「特定非営利活動法人」という新しい公益法人が生まれて５年になりますが、サポートちたも平成１１年に NPO 法人格を取り、地域のため NPO を支援するために日々活動をしてまいりました。地域に住む市民一人ひとりがこの活動に参加し、また主体的にその地域のことを考える人やグループを育てていくという、そんな役割も私たちが担っていくということです。参加者の一人ひとりがその主体者という形で、これからの地域をあなた任せにしないで、自ら自分たちの地域を豊かにしていく、そんな地域づくりを期待しています。

少子高齢化社会といわれる、私たちがまだ経験のない社会へと生活そのものが大きく変わってきています。暮らし方、働き方、住まい方、すべてが今まで描かれた生活ではなかなかうまくいきません。そんな中で地域の課題もたくさん生まれてきています。その課題解決に向け、行政だけでなく私たち市民の側からも直接まちづくりあるいは地域づくりとして新しい仕組みを作り出したり、新しい居場所づくり、コミュニュティづくりにつなげたい、という思いで今回の協働支援事業に取り組んでいます。

この「協働」というのは、行政と市民が一緒になってまちのこと地域のことを考え、これからの地域づくりに活かしていきたいということです。皆さんが楽しく一緒に考えあう場づくりを大切にし、セミナー終了後にそれぞれの地域へ帰った時、一人ひとりが何か自分の一歩を踏み出せるといいなと期待しています。

2003 年 9 月 27 日　　特定非営利活動法人　地域福祉サポートちた

代表理事　松下　典子

---

*ＮＰＯ＝民間非営利組織。ボランティアや草の根の活動が組織化されたもの。特定非営利活動促進法に基づく法人格(ＮＰＯ法人格)を取得した組織に限らないが、最も狭い意味のＮＰＯはＮＰＯ法人である。

目　次

はじめに

セミナー開講に寄せて

第１章　地域再生？なぜ？だれが？どうやって？

１　なぜ今「地域再生」なの？ ･･････････････････････････････････ 3

２　私たち一人ひとりが主役 ･･･････････････････････････････････ 3

３　フィールドワークとワークショップで計画づくり ････････････････ 4

第２章　セミナーのプロセスデザイン

１　セミナー概要 ･･･ 7

２　セミナーのプロセスデザイン ･････････････････････････････････ 9

第３章　地域再生起業プランセミナー

第１回　マイナスの未来予測 ･････････････････････････････････ 13

第２回　プラスの現状把握 ･･･････････････････････････････････ 19

第３回　プラスの未来予測 ･･･････････････････････････････････ 26

第４回　事業コンセプト ･････････････････････････････････････ 29

「ゆいの会はこうしてつくられた」 ･････････････････････････････ 33

第５回　マネジメント ･･･････････････････････････････････････ 37

第６回　事業プラン ･･･ 41

完成プラン ･･･ 44

受講者のふりかえり ･･ 48

第４章　あなたの起業で地域を元気に！

１　「起業」だから「事業」「ビジネス」の視点 ････････････････････ 53

２　コミュニティ・ビジネス ･･･････････････････････････････････ 53

３　たじみコミュニティ・ビジネス ･･････････････････････････････ 54

４　受講者のこれから ･･ 57

５　もうはじまっている、新たな起業物語 ･････････････････････････ 60

第５章　協働＝新たな公共づくりのために

１　明るい未来を創る市民の意思 ･･････････････････････････････ 63

２　人々がつながりあう新しい関係づくり ････････････････････････ 63

３　行動する市民が地域を元気にしていく ････････････････････････ 64

参考資料

１　地域づくり協働支援事業実施状況 ･･･････････････････････････ 67

２　地域課題の概要 ･･･ 68

３　地域づくり協働支援事業イメージ図 ･･････････････････････････ 69

第１章

地域再生？

なぜ？だれが？どうやって？

１　なぜ今「地域再生」なの？

私たちは、社会の急激な変化にとまどいつつ、一人ひとりが自分の生き方、地域での暮らし方を見直す時期に来ているようです。安心して住み慣れたまちで心豊かに暮らすために何が必要か、一緒に考えてみませんか？日頃気になっている暮らしの疑問やさまざまな想いを話し合いながら、広く市民と行政がともに生活者の立場で学びあい、具体的な地域再生プランを創っていくセミナーです。

地域再生起業プランセミナーの募集チラシに上記のような文言を掲載したところ、26 人の市民と８人の行政職員が集まりました。

「地域再生」こんなことを個人のレベルで日常考えている人がどれほどいるのでしょう？「地域」という抽象的な言葉についても、そのエリア区分は各人各様でしょう。ましてや、その「地域」を「再生」するだなんて。募集に際しては、「地域の活動やボランティアに関心のある人」「みんなで地域を元気にしたい人」と並び「身近な生活に問題を感じる人」とも、うたいました。誰もが毎日「生活」をしています。その延長で考えると「地域」と自分との関わりがきっと見えてくるはずです。

身近な生活の問題とはなんでしょうか。受講者は、セミナーの「地域の現状把握」のなかで、「地域経済の不振」「介護や子育ての支援不足」「犯罪の多発」「社会的弱者に対する支援不足」「子どもの多様な問題」「雇用不安」などを挙げ、安心安全な地域での暮らしがおびやかされているとまとめています。原因としては、「社会全体の経済不振」に加え、「少子高齢化」「人口バランスの崩壊」「価値観の多様化」「人間関係の希薄化」が複雑に絡み合っていると考えられています。「だから個人のレベルではどうしようもない」とあきらめたり、行政等に頼って誰かがやってくれるのを待っていては何も変わっていきません。「そんな地域だからこうしたい、こう変えたい」と主体的に地域づくりを考えることのできる人材が、今求められているのです。

２　私たち一人ひとりが主役

現在の日本は、地縁的なコミュニティが崩壊し、従来の世間的なつながりがどんどんなくなってしまって、個人がバラバラになっている時期である。・・（中略）・・その一方で、旧来の伝統的な価値観から解き放たれ、人々は一見自由になったようにも見える。しかし、自由と放任とは違う。自由というのは自分で考えて意思決定することができることであり、自堕落で放任されていることとは違う。個人がバラバラになってコミュニティが崩壊している現在の日本は、いいかえればルールもなく、拠り所もない放任状態といえる。・・（中略）・・個人の自由と自発を基盤としたコミュニティを再構築して新しい枠組みをつくろうとしても、以前のような自治会や町内会などの地縁的なコミュニティのあり方ではもう無理である。

『協働のデザイン』(学芸出版社)のなかで、世古一穂さんはこう語っています。同じ地域に住んでいるからいっしょに何かやりましょうではなく、「私は高齢者のデイサービスをしたい」「環境について考えたい」など、個人の自発的な問いから発する仲間づくりを提唱しています。バラバラになった個人をもう一度一人ずつ個人としてこの指とまれをやり、テーマによって結びつける、「市民の自発的主体的参加によるテーマ型コミュニティ」づくりです。そこから始まる市民社会は、私たち自身がこれからの社会をどんな社会にしようとするのか一人ひとりがきちんと考え、意思決定し、自己責任をとっていくという、本来の民主主義を達成していくことでしょう。私たち一人ひとりが主役です。

３　フィールドワークとワークショップで計画づくり

「テーマ型コミュニティ」。その一例は、サポートちたの会員 36 団体(2004 年 3 月現在)そのものでもあります。このネットワークには、高齢者や障害者支援を中心とした目的に沿った仲間づくり・組織づくり・経営のノウハウと、想いのある人をエンパワーするソーシャル･キャピタル[1](社会的なつながりとそこから生まれる規範･信頼)が存在しています。これら NPO の現場を見ることで、テーマ型コミュニティの実際に触れ、先進的な取り組みを新しい地域デザインに活かすことができます。すでにサポートちたが毎月開催している NPO 現場見学バスツアー[2] や平成 15 年に行った地域ケア起業講座[3] などで、その成果は実証済みです。そこで、セミナーのなかにフィールドワークとしてこのバスツアーを組み込みました。

さらに「市民の自発的主体的参加」を進める方法として、多くの人びとの協働作業を通して固定観念にとらわれない発想と新しい解決方法を見出していく「ワークショップ」が有効です。ワークショップとは、講師から一方的に知識・技術を伝達されるのでなく、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけでなく「からだ」や「こころ」を使って体験したり、相互に刺激し学びあう、集団での学びと創造の場です。

地域の問題はどれも複雑で深く絡み合っていて、唯一の正解や解決策があるというわけではないからこそ、私たち一人ひとりが孤立しないで集いあい、これからどう取り組んでいったらいいかを問いあうことが大事です。ワークショップを通して、人と人の関係を豊かにし、人と社会の関係を健全にすることで、個人の成熟を基盤とした本物の市民社会を創り上げることができるのです。

---

[1] ソーシャル・キャピタル＝物的資本や人的資本などと並ぶ概念として、近年世界的に注目を集めつつある。共通の目的に向けて効果的に協調行動へと導く社会組織の特徴とされる。H14 年度内閣府委託調査「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」より

[2] ＮＰＯ現場見学バスツアー＝サポートちた会員数団体を訪れ、福祉ＮＰＯの現場から学ぶバスツアー

[3] 地域ケア起業講座＝市民自らが地域の実態に合った地域ケアを創出し、豊かで安心安全な地域づくりに貢献する人材を育成し、ＮＰＯ設立や運営について支援する連続講座

第２章

セミナーのプロセスデザイン

１　セミナー概要

【講座名】

――私たちがデザインする地域づくり――

地域再生起業プランセミナー

【開催日時】

第１回	平成１５年	９月２７日	土	１３：３０～１６：３０
第２回		１０月１１日	土	９：４５～１６：３０　バスツアー
第３回		１０月１８日	土	１３：３０～１６：３０
第４回		１１月　１日	土	１３：３０～１６：３０
第５回		１１月１５日	土	１３：３０～１６：３０
第６回		１１月３０日	日	１３：３０～１６：３０
発表会	平成１６年	２月　７日	土	１３：００～１６：００

【開催場所】

ＮＰＯ・ボランティア情報ひろば 2 階研修室(愛知県知多市緑町 31-1)

【主催】

愛知県

【企画・運営】

特定非営利活動法人　地域福祉サポートちた

【プログラム】

これからの地域を再生していくためには、市民・企業・行政がお互いの立場を超えて地域課題を共有するための話し合いの場を持ち、協働しながら役割分担をはかり実践していくことが必要です。セミナーでは、課題解決型で新しい公益や公共を担っていくサービス提供を事業として起業し、継続的な運営を行っていく人材を育成するために、次の 5 つの観点に沿って、セミナープログラムを組み立てました。

１．自分自身から発する問題が、地域の課題であることに気づく
２．先行事例を見て、感じることから学ぶ
３．「事業」の視点を持つ
４．円滑な協働関係を築く
５．地域再生のビジョンを描き、新たな公益を担う意識を持つ

セミナープログラム

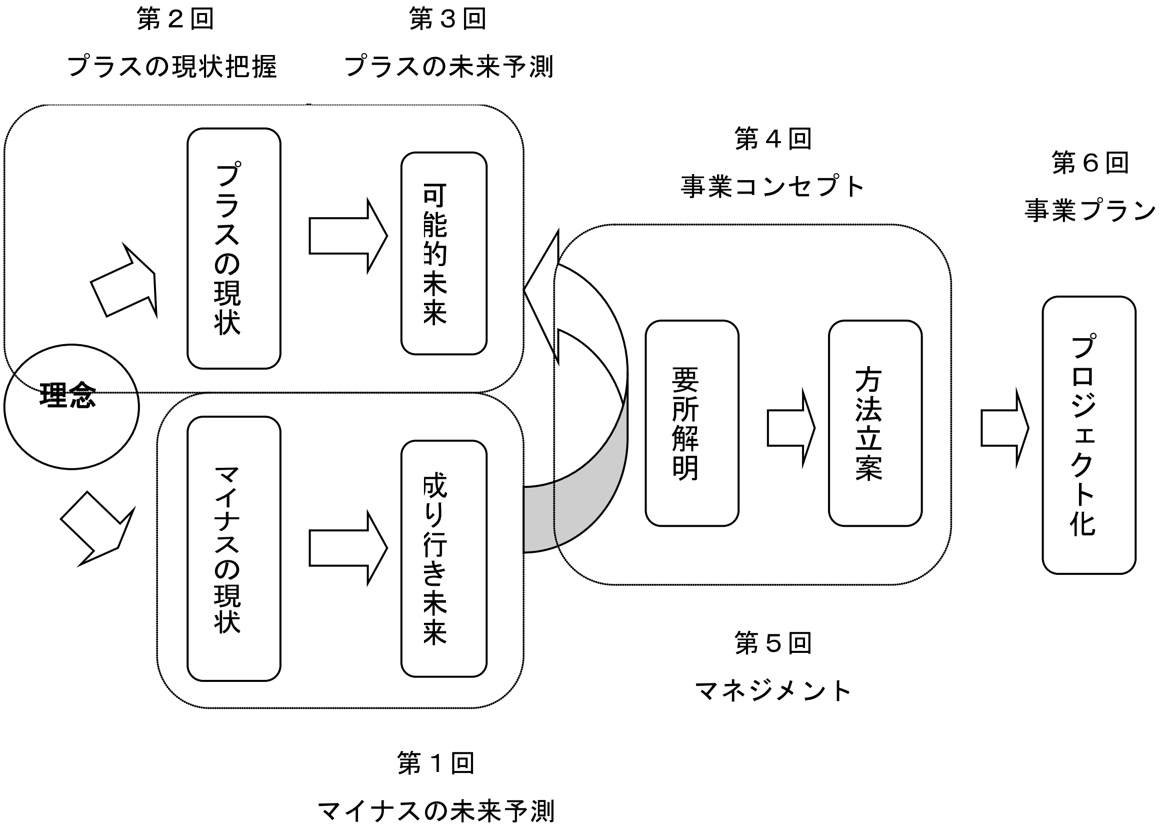
回	テーマ	内容	形式	講師
第1回	マイナスの未来予測	アイスブレーキング		久野美奈子
		「地域づくりをデザインするってどういうこと？」	講義	
		ワークショップについて		
		マイナスの現状	ワークショップ	
		成り行き未来		
第2回	プラスの現状把握	先行事例見学	フィールドワーク	サポートちた事務局
		発見をまとめる	ワークショップ	
第3回	プラスの未来予測	理念	ワークショップ	鈴木直也
		理念実現に向け注目すべき資源を考える		
		可能的未来		
第4回	事業コンセプト	「ゆいの会はこうしてつくられた」	講義	松下典子
		要所解明	ワークショップ	鈴木直也
		方法立案		
第5回	マネジメント	事業名	ワークショップ	鵜飼宏成
		事業概要		
		活動計画		
第6回	事業プラン	活用資源	ワークショップ	関戸美恵子
		事業計画表の完成		
		プラン発表		
		「生きる、暮らす、働くことをつなげる事業を」	講評	松下典子

【講師】

久野美奈子　(特定非営利活動法人起業支援ネット事業推進局長)
鈴木直也　(特定非営利活動法人起業支援ネット常務理事)
松下典子　(特定非営利活動法人地域福祉サポートちた代表理事)
鵜飼宏成　(特定非営利活動法人起業支援ネット常務理事)
関戸美恵子　(特定非営利活動法人起業支援ネット代表理事)

―敬称略―

２　セミナーのプロセスデザイン



セミナーのプロセスデザインは上図のとおりですが、7ページの５つの観点に沿って次のように進めました。

第１回で、ワークショップの地域の課題認識からマイナスの地域未来像「成り行き未来」を描きます。

第２回、プラスの現状把握としての先行事例見学を経て、

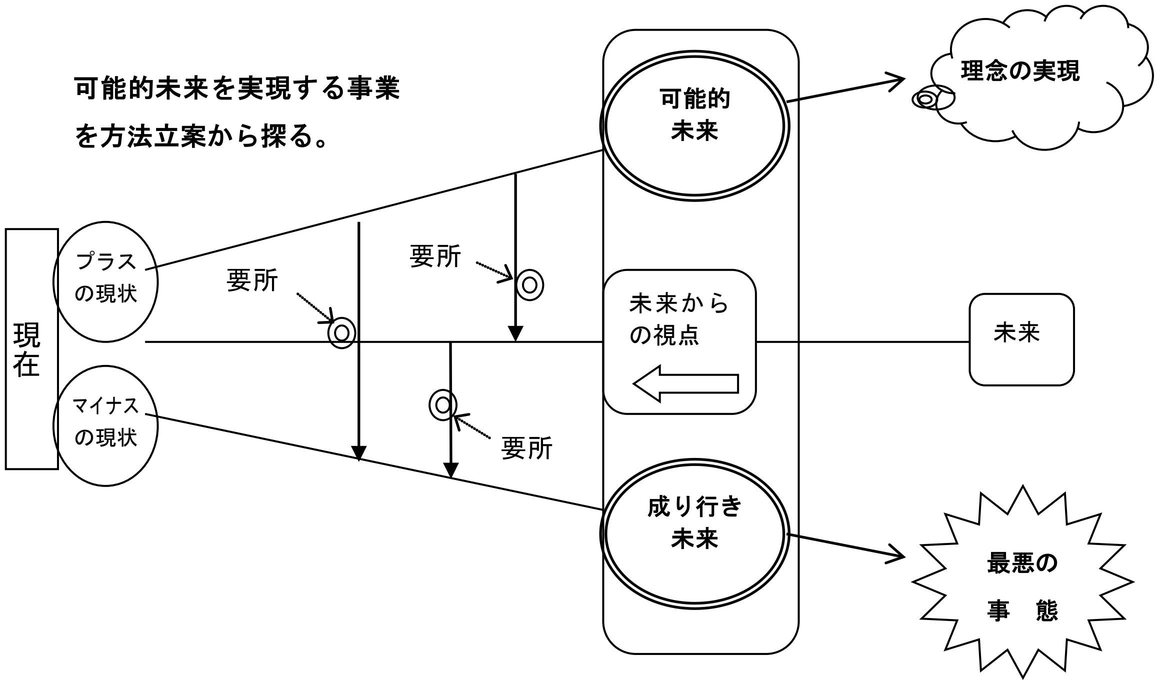
第３回に地域理念を設定、プラスの現状(地域資源をフル活用)から考えうる「可能的未来」を描いた後、

第４回は、いよいよこのプロセスデザインのポイント「要所解明」です。可能的な将来を阻んでいるものを未来から現在を見る視点で解明します。「可能的未来」が訪れる可能性があるのに、「成り行き未来」になりかねないのはなぜか？「可能的未来」を阻んでいるものが真の問題「要所」であるという考え方です。次ページ「要所解明の考え方」参照。あとは、この「要所」を踏まえて方針と具体策を出し、

第５回で具体策を実行する活動計画を練っていきます。

第６回、活用資源とその活用方法を考えて「地域再生起業プラン」の完成です。次ページの「事業計画表」に以上のプロセスをまとめます。

要所解明の考え方



事業計画表

<table>
<tr><td colspan="2">**事業名** 第５回</td><td colspan="2">プロジェクトメンバー</td></tr>
<tr><td colspan="2">**事業理念** 第３回</td><td colspan="2" rowspan="2">**地域再生イメージ（地域利益）**
第３回</td></tr>
<tr><td colspan="2">**事業背景**</td></tr>
<tr><td colspan="2">**事業概要** 第１回
（事業内容）

（サービス）

（顧客）
第４回

（特徴）</td><td>**活動計画**
１．＿＿＿＿＿
①
②
③
２．＿＿＿＿＿
①
②
３．＿＿ 第５回 ＿＿
①
②
③</td><td>**活用資源**
ａ）＿＿＿＿＿
活用方法：

ｂ）＿＿＿＿＿
活用方法：

ｃ）＿＿ 第６回 ＿＿
活用方法：

ｄ）＿＿＿＿＿
活用方法：</td></tr>
</table>

第３章

地域再生起業プランセミナー

第１回　マイナスの未来予測

講師　久野美奈子

１－１　アイスブレーキング

受講者のゆるやかな関係づくりを目的とした井戸端マーケティング的自己紹介を次の３ステップで実施しました。

①「私が大好きなもの」で自己紹介――私個人としての参画

②「一生のうち一度はやってみたいこと」で自己紹介――私の理念・夢を伝える

③「私は地域のこんな問題を感じている」で自己紹介――地域の現状を出し合う

１－２　地域づくりをデザインするってどういうこと？　講義

起業に欠かせないプロセスとは、やりたいことを形にするのに何があって、何が不足しているか、自分の持っている情報を一旦外に出し、並べ替え新たなストーリーをつくること、それを人と共有するための「ものがたり」をつくるという、情報を再構築、再編集することだと学びました。

１－３　ワークショップという手法について　講義

回を重ねながら受講者が今持っている想いを出し合い、考えを練り合いながら、起業のための事業プランをみんなで創っていきます。いわゆる知識吸収型ではなく、受講者ひとりひとりが自分の思いや知っている情報などを出し合いながら、創造していくためにワークショップという手法を使って、和気あいあいとお互いに知り合いながら、進めていきます。セミナー全体を通して、受講者がいろいろな人と触れ合うことを大事にしたいという目的をもって、座っている順に１から４までを点呼してもらい、４グループに分かれるというランダムなグルーピングをしました。１グループに一人づつ補助ファシリテーターが入ります。このワークショップでは、次の３つのルールを守ることを全員で確認しました。

ワークショップのルール

① 他人や自分の意見を否定しない

② 言いたくないことは言わなくてもよい

③ 人の意見をよく<u>聴く</u>

これが一番大事！

１－４　マイナスの現状把握　ワークショップ

自己紹介の③で個人が書いた問題について具体的な「現実に起きている事実」を個人で付箋紙に記入。各グループごとに参加者の中からリーダーを２人選出。模造紙に付箋紙を貼りながら事実を発表、集類した４グループの成果を下記のようにまとめました。

マイナスの現状

地域の関わりが少ない

- 隣近所に住む人を知らない
- 地域行事への参加が少ない
- 子どもに注意できない
- 玄関にカギがかかっている

弱者に対する支えがない

- 老々介護
- 障害者は施設入所

人々がモラルに欠ける

- 違法駐車が多い
- グランドで犬を放す
- 犯罪増加

教育が危うい

- 学級崩壊
- 不登校増加

居場所がない

- 子どもから老人まで
- 高齢者同士
- 若者

働く場がない

- 養護学校を卒業した障害者
- 子育て中の母親
- リストラ

地域経済の不振

- 商店街に空店舗が多い
- 商業販売額が低い

市民主体のまちづくりになっていない

- 投票率の低下
- 行政サービスが市民ニーズにあわない
- 市民の声が議会に届かない
- 地域活動情報を市は把握していない

↓

こんな現状を放置するとどんな地域になってしまう？

１－５　成り行き未来を予測　ワークショップ

その現実を放置しておくとどうなってしまうかを個人で付箋紙に記入、模造紙に集類しながら最悪の未来図を描いていきました。４グループの成果をまとめました。

成り行き未来

利己主義の人間が増える
少子化が進む
家庭崩壊
災害時の被害増加
少数派が無視される
凶悪犯罪が増える
税負担増加
ボランティアの自然消滅

→

将来に希望が持てない
夢がもてない
人を信頼できない

↓

自治体の崩壊

←

文明社会の崩壊
戦争になる
日本沈没

１－６　講評

久野美奈子

このままじゃ大変

やっぱり、マズイですよね。このままだと。どの班の未来予測っていうのもこのまま放置したら、「夢が持てない」「地域のつながりがもっとブチブチに、今以上に減ってしまうだろう」「そういう流れの勢いの中に飲み込まれてしまうだろう」というようなことが出ていますね。社会的弱者や若者の方に結局はしわ寄せがいってしまうんじゃないだろうか。もう「文明社会の崩壊」「日本沈没」なんて言葉まで飛び出しているんですが、これも現状から導き出された結論なんですね。

一人では無理でも仲間と

これ一つずつ、これ全部を私たち一人ひとりが、食い止めようとか居直ろうと思っても、それは無理ですよね。非常に難しいことです。現状の流れに飲み込まれて、巻き込まれていってしまうっていう、一人ひとりの持っている力の限界というものも一方ではあると思います。でもですね、「このままじゃいかん、何とかしなあかんね」っていうのが、どの班からも声として上がっていたんじゃないでしょうか。で、一人じ

ゃ出来ないことだったら、二人でやればいい。二人でダメだったら、三人でやればいい。という仲間が、今日この場に集まっているんじゃないかな、と思います。

先輩から吸収し、どう活かすか？

そして、すでに第一歩を踏み出している先輩方っていうのも、地域社会の中に少しずつですが出てきているわけなんですね。次回の講座では、そういった一歩先に前に踏み出された、先輩たちのところを見学という形で、バスで回っていただくことになっています。そこでまた、そういった成り行き未来にならないために、その人たちがどんな思いで、どんな行動を起こしたか、って言うことを是非吸収していただきたい。そして、じゃあ私はどうしようかと。それが結果、事業を起こすということになるかもしれないし、そうではなくって、何か活動的なことでやっていくかもしれない。それから地域の中の町内会だとか、PTA の活動の行事の一つとして何かをやっていこう、ということになるかもしれません。それは様々ですけど、何か一歩踏み出していけるようなものを作っていきたいと思います。

自分の情報を持って次の一歩に

こういった、地域がどうなっていくとか、日本がどうなっていくというのは、新聞や雑誌でも、実は結構言われていることだったりしますよね。このまま行くと、財政破綻するとか言われています。でも、私たちは単なる情報の受け手として存在している時は、そんなに実はヤバさっていうのを感じない。というか、今悲しい出来事だとか、暗い未来の予測っていうのが多く出過ぎていて、それにいちいち反応していたらもう身が持たん、ということで、あえて感覚を麻痺させている部分ってあると思うんですね。でも、今回出てきたものは、外からの情報ではなく、外からの情報を踏まえて、いったん自分の中を通って出した情報です。それは自分の情報なんですね。そういうものは、新聞に書いてある「高齢化問題」という一行と、この模造紙一枚一枚に書いてある「高齢者問題」っていうのは、重さが全然違うわけなんです。そういう問題を今日、共有することが出来ましたので、是非次の一歩につなげて行きたい、と思います。

１－７　ふりかえりシート

受講者には毎回セミナー後に「ふりかえりシート」を記入してもらうことによって、自分の感じたことを確認し、次のステップに進む踏み台としてもらいました。

他者について気づいたこと

- 受講者皆が元気で、若く、女性が多い
- 地域や行政を一番心配しているのは女性。目先だけでなく将来を直感的に感じ取っている
- 知多地方だけでなく、県内各市町から参加されている
- 全然知らなかった人とでも、ゲームをしながら楽しく話し合いができた
- 皆が地域の現状に問題を持ち、真剣に取り組もうとしている
- 熱い想いを持った人が多くいた
- 地域の問題について同じ様なことを感じている人が多い
- 自分の思いもつかない考えを持った人がいた
- 生活への安心･安全への関心が高い事を実感した

自分自身について気づいたこと

- ワークへの参加姿勢、私自身はこれでよいのだろうか？圧倒された自分を発見
- 自分が、思っている以上に地域の現状を知らない

地域の問題について気づいたこと

- 身近で不安な事がたくさんあり、びっくり
- やはり問題は弱者にしわよせが来る
- 自分の問題を原点とした未来予測は実感あり
- 自分が抱えている問題以外にもいろいろな問題や考えがあることがある
- 問題はどれも切り離せないというか、つながっている
- みんなの想いを活かせれば、もっと住みやすい社会になるのではないか
- 人のつながりが欠けているため想いが行動に移せない、あるいは活動に発展性がない

その他

- NPO の本当の意味を知った

満足したこと

- 悩みを共感しあったり、グループで問題を共有でき安心した
- 地域を何とかしていきたいと考える人とたくさん知り合え、話し合えた
- もっと話してみたいと思える人を発見した
- 楽しく議論できた
- 人との関わり方に自信が持てた
- 自分の意見を発言でき、尊重された
- 日常より深くいろいろ考えられた

不満に思ったこと

- ワークショップという形式が初めてで不安だった
- ワークショップのテーマが絞りきれなかった
- リーダーの役割を担いきれなかった
- 他者の発言の内容が理解しにくかった
- 未来予測が暗すぎる
- 人に言われて気づいたことがあった
- あれこれ考えてしまい、なかなか発言できなかった
- 起業に重要なことが自分の最も苦手な「創造」だと講師に言われたこと
- 他の参加者の名前が覚えられない

言い残したこと

- 「地域」を物差しにしたことが失敗だったが、反面重要なキーワードであること
- このセミナーに今後も出席したい
- 「行政は地域活動の情報を予想以上に把握していない」という声は耳が痛いが、改善したい
- 社会を担っていく子どもが減っていくという事は、これからの社会に希望が持てないということ

第１回では、元気で気持ちの若い受講者が地域の課題について熱く語る姿に共感したり、「自分の思いもつかない考えを持った人がいる」「私自身はこれでよいのだろうか？」と圧倒されたりする中で、「問題はどれも切り離せない」と実感し、自分の問題を原点とした未来予測には誰もが戦慄、「皆の想いを活かし、住みよい社会をつくる」ため、「人のつながりを取り戻そう」という動機付けができました。

第２回　プラスの現状把握

何を発見するかはあなた次第の先進事例見学バスツアー

サポートちた会員団体のうち３つのNPOと１つの任意団体を訪問し、それぞれの現場を見学、さらに代表から立ち上げの想いや経緯を聴くバスツアーに出かけました。その後、受講者はツアーでの発見を思いつくまま付箋紙に書き出し、気に入った団体についてまとめるワークショップを行いました。

２－１　NPO法人ゆいの会

「ともに生きる地域社会を」の理念の下、旧織物工場を有効利用し、介護保険事業のほかたすけあい活動、陶芸やさをり織りなどの生きがい活動、子ども対象のアートスコーレ等を行う。天井が高く床面積の広い古い建物が、ゆったりとした時間の流れをかもし出す。

[代表者]　竹内俊就
[所在地]　知多市新知字西屋敷２１
[設立]　１９９１．５．１
[法人設立]　１９９９．８．２０
[会員数]　４４０

グループワークでまとめた発見

大したもんだよ！！「ゆいの会」

・設立時に地域から拒否された

地域の財産を活用
・個のボランティア
・創作品
・初め小さく次々に多くのことを実現

誰でも気軽に参加できる空間
・老人から子ども、障害者まで
・歩いてこれる距離

課題
・今後の発展
・対象者ごとに活動場所が分かれている
・大きすぎる
・災害対策

安心感
・組織として完成
・問題点が見えない
・老舗的で心強い
・夢や目標は実現されている

建物の有効利用
・古い建物を再生
・建物の価値を高めている
・スペースに余裕がある

提案
・個々の活動をまとめる
・喫茶店を作ったら？

２－２　NPO 法人もやい

「くらしの小さなお手伝い」をキャッチフレーズにたすけあいの輪を広げ、やがて迎える老いを豊かなものにし、誰もが安心して子どもを産み育てられる地域づくりをめざす。在宅福祉サービス事業をはじめ、地域の寄り合い所としての機能を果たす。

[代表者]　　安井洋子
[所在地]　　知多郡阿久比町卯坂英比１６
[設立]　　　１９９７．４．３
[法人設立]　１９９９．９．１
[会員数]　　２２８

グループワークでまとめた発見

有償で利用者の心の負担を軽く「もやい」

共生

・利用者がいきいきしていた
・温かな家庭的な雰囲気
・地域の特性にあった活動
・ご近所仲間で地域密着 NPO
・事業性を考えないやり方に共感
・世代間の支えあい
・まちづくりはたすけあいのコンセプトから

経緯

・3年で行政が認め7年で地域が受け入れた
・立ち上げ以降の時間も財産にした

課題

・次世代育成
・社会保障なども組織維持のために必要
・男性の利用者が居ない

地域資源の利用

・古い民家を再生

・利用者の心の負担を軽くする有償活動

・他団体とのネットワークは財産

２－３　NPO 法人ふわり　喫茶なちゅ

「障害者をふわりと包む」をコンセプトに、どんなに障害が重くても生まれ育った地域で安心して生活するために必要なサービスを展開している「ふわり」が障害者の雇用の場として喫茶店「なちゅ」を経営。旧保育園利用。メニューは養鶏などによるナチュラルフード中心。

[代表者]　戸枝陽基
[所在地]　半田市東郷町３－２１
[設立]　１９９９．４．１
[会員数]　３１０

グループワークでまとめた発見

強い想いとマネジメント能力の高い「ふわり」

道具としての NPO
- 社会福祉法人より即断即決でスピード対応
- 税制批判に同感
- 社福と NPO を縦横に駆使して使命を果たす

代表戸枝氏の想い
- 強い想いが強いエネルギーに
- ホンネで生きている
- 障害者のための地域福祉
- 障害は一つの個性という考え方
- 障害者を一人の人として接する

対行政
- 実績を行政に示した
- 忍耐をもって行政とつきあう
- 法律、制度を研究し尽くして事業展開

対障害者
- 障害者にも適材適所
- 障害者の働く場
- 付加価値の高い障害者自立支援の一例

経営
- マネジメント能力の高さ
- 資金の準備
- ビジネス感覚
- システムの確立と運営の確かさ

２－４　ふれ愛・生きがい・たすけあいの会はっぴいわん　ふれあい食堂「はっぴいひろば」

「おだやかなまちの中であたたかいサービスを」をモットーに、高齢者にやさしい商店街活性化の取り組みの中で、人々が最後まで元気で自分らしく生きていくための居場所づくりとしてのふれあい食堂を経営している。

[代表者]　久保田久代
[所在地]　常滑市大野町７－６５
[設立]　１９９８．５．８
[会員数]　１８８

グループワークでまとめた発見

こんなたまり場がいっぱいあれば「はっぴいひろば」

久保田さんの人間性

・「人生の最期までいいモノを見て表現をしたい」という考え方
・理想の老後、最期の迎え方の「こだわり」を形にした
・高齢者の居場所、生きがいの場づくり
・想いに共感する人が集まった
・主婦はいろいろなプロだという考え方

地域

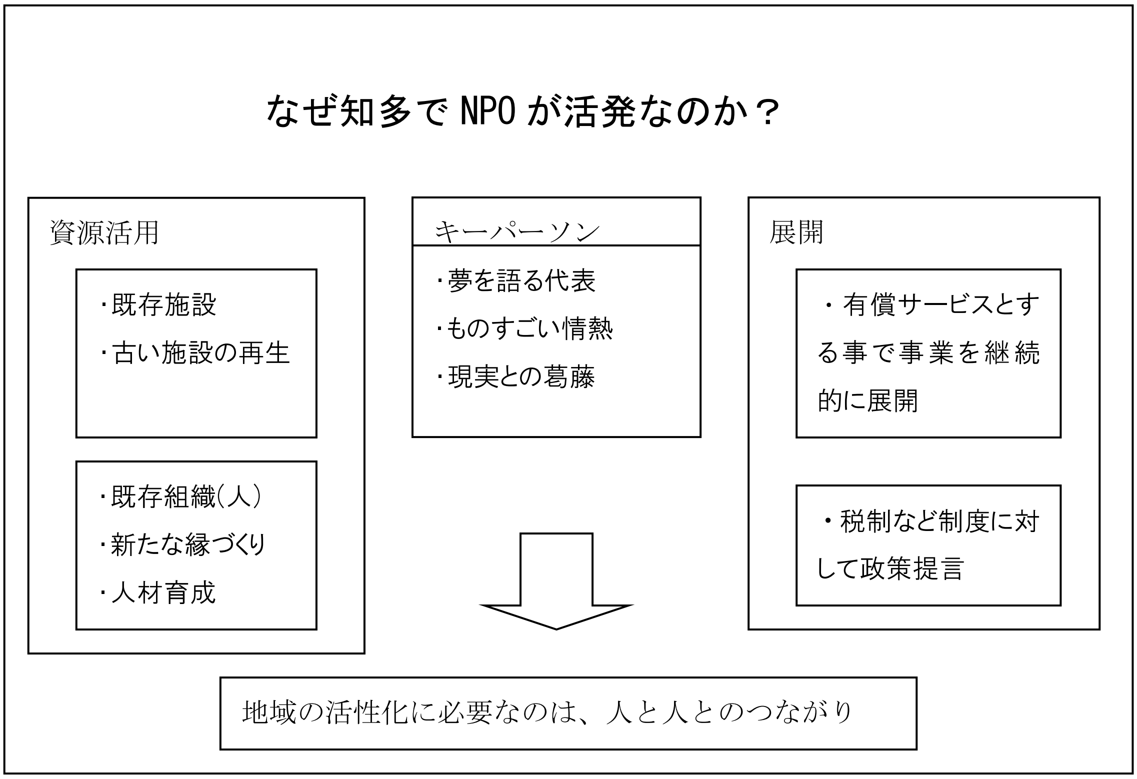
・地域密着の心あたたかい活動
・老人が一人で歩いていけるエリアが「地域」、そこに集う場がある
・凝集性が高いので、対立もあるかも

形

・熱意は伝わるが、運営費に先細り感がある
・あえて NPO 法人格をとらない
・事業性よりミッション性を選択

２－５　なぜ知多でＮＰＯが活発なのか？

また、受講者からどの団体にも共通して言える発見をまとめてみたいという声が上がったので､希望者でワークショップを行いました。受講者から提案されたキーセンテンスは、「なぜ知多で NPO が活発なのか？」。これは、毎月開催されている NPO 現場見学バスツアーの参加者からもたびたび尋ねられる質問です。さて、セミナー受講者からはどんな回答が飛び出すでしょうか？



上記のように、まず｢強い想いを持ったキーパーソン｣がいて、｢場所｣や｢ひと｣などの資源活用、活動の維持継続を図る事業展開と必要であれば制度を変えていく政策提言などを挙げたあと、このどれをも可能にするものは、やはり｢人と人とのつながり｣だと結んでいます。

２－６　ふりかえりシート

ツアーで発見したもの

- 代表の強い想いや理念と行動に移すエネルギー(ただし後を継ぐ人がいるのか不安)
- 既存の建物をリフォームするなど、地域の財源をうまく活用
- 「地域エリア」とは「歩いていける範囲」という位置付け
- 地域再生の担い手は自分たちだということ
- 各団体の個性、多種多様なやり方があるということ
- 質問に「資金」のことが出たのに驚いた
- NPOの活動には強いリーダーと地域の理解、すこし資金も必要
- 地域づくりのためには、立ち上げ者の強さと人と人の関わり、理念の共有が大事
- 地域福祉を身近に感じた
- NPO創始までにはミッションとエネルギーが大事

満足したこと

- 戸枝氏が障害者を１人の人間として大切に接している事に感動
- 資金がなくても活動できる事を知った
- バスの中で参加者と話し合いが出来たこと
- 実際に活動している人の生の声、情熱的な話を聞けた。
- 障害者がいきいきと働いている姿がうれしかった
- それぞれの活動が行政の関わりナシに出発したこと。
- ワークショップに参加できたこと
- 普段周りにいない素晴らしい人にめぐり合えたこと
- 小さなことから始めれば私たちにもできるかなと思えた
- 団体代表の強烈な個性に出会えた
- 老人サロンのモデルを見たこと
- セミナーに男性が多くいたこと
- 地域のことは地域で、行政には必要以上に頼らないという考えをNPOの皆さんが持っていること

不満だったこと

- 男性利用者の姿が見当たらない
- ワークショップの進行がうまくできなかったこと
- 見学先の資料を先に見たかった
- 子どもと老人の触れ合いの場が少なかったこと
- 行政は何の役にも立っていないこと

- ふわりで社協の対応が遅いという話にがっかりした
- 車のアイドリング、環境上よくない
- ふわりで食事を取りながらの説明でメモを取ることができなかった
- 参加者のメンバーの詳細がわかるとよかった
- ワークショップで自分の意見が否定されたので残念だった
- ワークショップで福祉のイメージについて「暗い、ジメジメしている」と言われたこと

あなたの地域で活かそうと思ったことは？

- 尾西の街中の使っていないお店を皆が集える場にできたら
- 地域資源（公共施設）。とくに市町村合併により余る施設は上手に使いたい
- 既存の建物を活かすこと
- 自立の高齢者支援
- 商店街の空きスペース
- 想いを同じくする人
- 戸枝氏に講演を頼みたい
- まずはご近所の子どもから高齢者まで輪を作りたい
- グループホーム展開
- 地域の困っている人を救える場所づくり
- そういう発想をしたことがない（反省）
- 人と人のつながり
- 古い街並み
- 公民館をもっと活用
- 建造物をはじめとする地域資源を見直してみよう
- 身近な人からそうでない人まで明るい笑顔で接しようと思った。
- 農家とサラリーマンの混在する我が安城東部地区の介護ケア前の老人交流の場づくりとして、個人の得意なことをいかに引き出すか、地道に対話を重ねることだと思う
- 商店主への働きかけ

「地域再生の担い手は私たちだ」ということを感じ取った受講者が多い中で、「自分の地域で活かそうなど、そういった発想をしたことがない」という行政職員がいたのが印象的です。今後は自分の住む地域を見る目も変わってくることでしょう。

このほか行政職員の声としては見学ツアーの発見として、「それぞれの活動が行政の関わりナシに出発したことがウレシイ」「地域の事は地域で、行政には必要以上に頼らないという考えをNPOのみなさんが持っていることに満足した」など、市民の主体的で自立した活動を評価するものが多くあり、半面「行政は何の役にも立っていないということが残念である」とも述べています。

第３回　プラスの未来予測

講師　鈴木直也

３－１　地域理念設定　ワークショップ

個人ワークで「どんな地域理念を目指しているのか」という地域理念を考えた後、前回の 4 つの見学先から気に入ったものを選ぶことでグルーピング。リーダーを立てグループごとに地域理念として集約、「理念実現に向け注目すべき資源」を出し合い(３－２)、さらにその資源が順調なシナリオで伸びていった場合、どんな地域の未来「可能な限り最高の未来」が訪れるか(３－３)をまとめました。出身母体の異なる受講者が集まった任意のグループで作成し、特定地域に対する具体的な理念を描いたわけではないので、結果 4 つのグループの理念はどれも似たような抽象的なものとなりました。

理念設定のキーワード

たすけあい
お互いさま
協力
自助互助
頼りあう
支え合う

個性を認め合う
多様な価値観
ホンネで生きていける
生きがい

安心
心豊か
あたたかな居場所

魅力ある文化
自然を大切に
よい環境

自立した地域活動

地域理念

1. 家庭的な居場所があり、個性を認め合う、人が豊かなまちをつくりたい

2. ありのままの自分と他人を尊重できる人間関係の中で自立した地域活動に支えられ、誰でも死ぬまで安心して心豊かに暮せる地域をつくりたい

3. 自然や文化を大切にし、支え合う元気な地域をつくりたい

4. 自ら主体となり、人と心のつながりがあり、積極的な地域づくりの取り組みを通じて協力できる地域をつくりたい

前回での気付き「地域再生の担い手は私たち自身だ」という重要ポイントは、「自立した地域活動」や「自ら主体となり」などの文言に表現され、人と人との関係を結び直していく地域づくりを目指していくことが確認されました。

３－２　理念実現に向け注目すべき資源　ワークショップ

場	人	もの	こと
空き教室	総合学習の住民講師	特産物(梅・竹炭)	伝統文化
保育園	子育てグループ	新しい音頭	三世代交流
青少年センター	コミュニティ		地域の一斉清掃
社協	婦人会		企業のデイサービス
障害者雇用の場	長寿会		NPO のサービス
ウミガメが産卵する環境	児童委員		富山型デイサービス
古い街並み	ボランティア		花いっぱい活動
休耕田			里山保全活動
市民大学			自然体験
福祉 NPO			歴史観光ガイド
			総合学習

３－３　可能的未来　ワークショップ

1. すべての小学校区内に子ども、障害者、高齢者、新旧住民すべてが集まってなんでもできる場所があり、心豊かなスタッフがいる

2. 自然環境に恵まれ、健康な高齢者が増え地域活動が盛んになり、地域経済も活発化、ゆとりがあってしなやかな社会で子どもが健やかに育ち、誰もが住みよい社会になる

3. 歴史散策ラリーや異世代交流プラザ、ウミガメの里、誰もが働くことのできる太陽ファーム、地域ブランド商品を全国に発信する知多の元気便などの活動で支え合う元気な地域になる

4. さまざまな市民グループがたくさんでき、ネットワークを組み、地域コーディネーターが活躍、遊休施設を有効利用し、ますます地域活動が活発になる

３－４　ふりかえりシート

地域の未来予測への気づき

- 「人のつながり」「人との協力」など単なる言葉を並べるのではなく、人の気持ちや心まで議論が深まればと感じた
- 福祉の方向に話が流れるかと思ったが、教育などに話が膨らんでよかった
- 自分のまちを振り返ることができた
- 人に伝えるためにははっきりした未来イメージをもつことが大事
- すでに資源はかなりあると知った。その延長線の先を思い描くのが難しいとわかった。未来予測に積極的に参加できず、不満足であった
- 人の心とかつながりを大事に思っていたが、それ以外のことに気が回らない自分に気づいた
- 皆さんが地域についてよく考え、よい地域にしたいという気持ちが強いのでうれしく思った
- 現状からだけの将来分析では、現状是認のみにならないか？課題を踏まえないと重要な視点が落ちる可能性がある
- 自分の住む地域をひょっとしたら知らないかも？と反省
- 私にとって 3 年は現在かも。「未来」ととらえることは難しかった
- 市民活動が活発になれば、社会は豊かになっていくと想像できた

ワークショップという形への気づき

- 異なる立場で意見を出し合えば、思いがけないものができる可能性があるということ
- リーダーとしての司会がうまくできなかった
- ワークショップの心構えが安心の場、思いやりの場、協力の場であること
- 話し合いの中で何を話し合うかが分からなくなる事があったので、追加ではなく始めに伝えてほしい。ファシリテーターが修正するのはルール違反なのか？
- リーダーだったが、みんなにリードされてた
- 司会は非常に難しいが助け合いがここにもあった
- 話に名前付けすることで整理しやすくなる

このワークにより「人の心とかつながりを大事に思っていたが、それ以外のことに気が回らない自分に気付いた」「自分の住む地域をひょっとしたら知らないかも」など自分自身への問い直しや、「すでに資源はかなりあると知ったが、その延長線の先を描くのが難しい」「人に伝えるために はっきりとした未来イメージ を持つことが大事」「市民活動が活発になれば、社会は豊かになっていくと想像できた」など地域づくりの方法論への気付きもありました。また、「現状(資源)からだけの未来分析では、課題が抜け落ちる」との指摘もありました。

第４回　事業コンセプト

講師　鈴木直也

４－１　グループ分け

この回からは、いよいよプラン作成ワークとなるので、前回の４つの地域理念のうちプラン作成までやってみたいと思うものを受講者が選び、４つのグループに分割。続く５、６回もこの固定化メンバーでプラン作成を行いました。

選択された理念は、

理念		グループ
2. ありのままの自分と他人を尊重できる人間関係の中で、自立した地域活動に支えられ、誰でも死ぬまで安心して心豊かに暮らせる地域をつくりたい	⇨	Ａグループ
3. 自然や文化を大切にし、支え合う元気な地域をつくりたい	⇨	Ｂ・Ｃ グループ
4. 自ら主体となり、人と心のつながりがあり、積極的な地域づくりの取り組みを通じて協力できる地域をつくりたい	⇨	Ｄグループ

の３つで、このうち３は希望人数が多いため２グループに分割。それぞれの理念に沿ってグループごとに可能的未来と成り行き未来の確認作業を行いました。

４－２　「ゆいの会はこうしてつくられた」 講義

続いて今日のワークの重要ポイント「要所解明」についてのレクチャー。これは、「理念の実現＝可能的未来」を阻んでいるものを未来から現在の視点で解明していくことですが、レクチャーに先立って、奇しくもこの考え方で立ち上げられた NPO 法人ゆいの会の経緯「ゆいの会はこうして創られた」を松下典子さんから聴きました。全文を 33 から 36 ページにまとめてあります。

４－３　要所解明 ワークショップ

理念に基づき可能的未来と成り行き未来を見比べながら要所「何をすれば明るい未来になるか」を考えました。次ページ参照。

４－４　方法立案 ワークショップ

出揃った要所を踏まえ方針や方策を考えあうワークを行いました。次ページ参照。

ワークの成果

Aグループ	地域理念	ありのままの自分と他人を尊重できる人間関係の中で、自立した地域活動に支えられ、誰でも死ぬまで安心して心豊かに暮らせる地域をつくりたい
	要所解明	① 子育て環境の整備がされていない ② 市民活動を支えるインフラ(経済的基盤・価値観)が整備されない ③ 自立した市民を育てる教育がなされていない
	方法立案	① 赤ちゃんから高齢者まで誰でも集まれる交流の場をつくる ② 市民活動をコーディネートする人材の確保と育成 ③ 市民活動に関心を持ってもらうためのきっかけづくり

Bグループ	地域理念	自然や文化を大切にし、支えあう元気な地域をつくりたい
	要所解明	① 利害が対立しない人間関係を形成する機会が少ない ② 地域の良いところ、モノ、ひとを発見できない。活かせない ③ 自然と触れ合う機会が少ない
	方法立案	① 住む地域を歩いて住民と対話し、その地域の新たな発見をする ② 人材コーディネーターの育成 ③ 異世代交流プラザをつくる

Cグループ	地域理念	自然や文化を大切にし、支えあう元気な地域をつくりたい
	要所解明	① 自然・文化・地域のつながりの大切さを伝える機会、場、人材がない ② 地域のつながりを作るコーディネーターがいない
	方法立案	③ 機会・人材・場のデータベースおよびプロジェクトの作成 ④ 自然・文化・地域のつながりを伝える人材育成 ⑤ コーディネーターが有給になるシステムをつくる

Dグループ	地域理念	自ら主体となり、人と心のつながりがあり、積極的な地域づくりの取り組みを通じて協力できる地域にしたい
	要所解明	市民による「市民課」的な窓口が設置されていない 市民活動をつなぐ組織や人が活かされていない 地域活動が就業機会に結びつかない
	方法立案	地域の課題を解決していくことのできるコーディネーターを育成 身近なところに溜まり場をつくる 地域資源を把握する

４－５　ふりかえりシート

今日の気づき

- 一人では考えられないこと、一歩踏み出すのに勇気がいることも、何人かで考えると想いがふくらむということ
- みなさん熱い想いを持っているなあということ
- 一人よりグループの方が良い考えが出ると思いました
- 想いを表現する事はとても大変
- 要所解明は難しかった
- みなさんにもれなく意見を出してもらえることは大切だ
- 地域にはよい可能性がある
- 夢に向かって着実にプランが展開されていることを実感
- 要所解明は問題までの関連図が描けていたら的を得たものになるだろう
- 未来からの視点で要所解明という作業が目新しかった
- 話しながらアイデアを出す事が方法としてはすぐれている
- 初心に戻り小さな事業で地域を変える一員として幸せを感じた
- 自分の中の融通をつけていくことの難しさを実体験
- 各人が描いているイメージが異なるため要所解明はかなり難しい

満足したこと

- 同じように子ども達に体験が必要と思っている人がいて、熱く話せたこと
- 要所解明の重要性が理解できた
- 「こういう場が欲しかった」と思ってくださった方、ありがとうございます
- グループリーダーを初めて行い、みなさんが意見やアイデアをしっかり出してくれこと
- 自分の意見を聞いてもらえる
- 自分の意見が受け入れられること
- 活発にWSできたこと
- 実践に結びつける作業に一歩近づいた感じがした
- 松下さんの考え方に感動した
- 意見が多く出た
- 最初頭の中でボーっとしていたことが最後にかなりクリアになった
- 地域を変えるポイントが少し見えてきた
- 同じ想いの方がたくさんいること
- 何か希望を感じた。住民による「市民課」というアイデアに感激

不満

- 理念が抽象的なため、それ以降の議論も具体化が図られないのでは？現状ではまだ方針の一つが漠然としており方向性が各グループとも見えていないのでは？
- 参加者が減ったこと
- 方法立案で考えるべき事がちょっとわかりにくかった
- 少々時間がなかった
- グループが 4 人しかいないので意見が少ないかな
- グループに取り残された人がいたような気がする
- ゆいの会の話をもう少し長く話して欲しかった
- 初めての参加でとまどった

その他

- NPOの起業テキストの紹介があればよい。

「要所解明は難しかった」が、「未来からの視点で問題を明らかにする という作業は目新しい」「地域を変えるポイント が少し見えてきた」「何か希望を感じた」「夢に向かって 着実にプランが展開されていることを実感した」「実践に結びつける作業に一歩近づいた」など、このプラン作成のプロセスを肯定する受講者が多くありました。

このほか「一人では考えられないこと、一歩踏み出すのに勇気がいることも 何人かで考えると想いがふくらむ ということに気づいた」「一人よりグループのほうが良い考えが出ると思った」「みなさんにもれなく意見をだしてもらうことは大切だ」「話しながらアイデアを出す ことが方法としては優れている」「最初頭でボーッと考えていたことがかなりクリアになった」など、ワークショップの有効性を体感する声も多数出されました。

一方、「理念が抽象的なため、それ以降の議論も具体化が図られない」との不満もありましたが、任意のグループで仮のプラン作成をしている限界かと思われます。

「ゆいの会はこうしてつくられた」　　松下典子

「何かおかしい」から学習会へ

毎日の生活の中で「何かおかしい」、問題が見えていても「仕方がない」で過ぎていくことが多くあります。本当に仕方がないことなのだろうか。日常の暮らし、生き方、社会との関わり方の中で、ある種の危機感を感じていました。思っているだけでは、何も変わらない、この想いを形に、また意思表示するために、そして実践するために、1991年５月、自分達でできる事から何か始めようと、仲間に呼びかけ学習と実践の場を発足しました。そのスタート段階では本当に先のことは何も見えませんでした。ただその時に何かできるはずだと、自分達でどんな小さな事でもいいから、まず一歩を踏み出したいという想いを共有するために、一緒にみんなで学習しようよということで、学習会から始まったわけです。

私の「可能的未来」

学習の始まりと同時くらいに実践も間もなく開始されました。実践の基本的な考えは、法人を取る時に、会の目的、活動の目的を表す定款にもなりました。そこにうたっている文言を紹介いたします。

「この会は誰もが、その個性と人格を尊重される共生社会を実現するために、また住み慣れた地域で心豊かに暮らし、困った時も安心して過ごせるまちづくりを進めるために、助け合い、育ち合いの理念で福祉サービスを提供することによって、生活文化の向上をはかることを目的とする。」

みなさま方のワークショップで「可能的未来」とかいろいろ不安な未来のことを議論されてきましたけれども、私も「じゃあ何が問題でどういう社会にしていきたいのか」、「どんなまちにしていきたいのか」ということをいろいろイメージし考えました。それは、私の生活から見える三つの問題意識、フェミニズム、ノーマライゼーション、生涯学習を活動理念の柱として、地域を変えたい、社会を変えたい、という想いでした。

「方法立案」が地域のたすけあい活動

一方地域に住み、生活している私達に何ができて、どうすればいいかを考えたことが、現場の実態としてのボランティア活動であり、ゆいの会の活動でもあったわけです。ゆいの会の活動というものは、地域での助け合い活動で、日常生活の中での家事援助、気持ちさえあれば誰でもできる、そんなことから活動が始まっているわけですね。そして最初からたくさんの活動があったわけではありません。自分達のできる範囲、そして自分達の責任が持てる活動っていったいなんだろうと思案しながらのスタートでした。

そして、活動する中でいろんな地域の現場、現状、問題が私たちの目に入り、あるいは声となって届いてきたものを、なんとかしたい、私達でもできるはずだというその想いが、仲間と一緒に次から次へといろんなサービスを産み出しているわけです。ですから私達が最初から何でもできるからやるということではなく、まずやれるという責任の一つ一つを確認しながら自分達で作り上げてきました。そんなことで、地域で何ができるかというのは、一人ひとりがその自覚とやろうという意志さえ持てば、必ずできるんじゃないかなと、ここまで形になり継続し、自信を持ちました。

もう一つ、「できる事を実践」ということですが、無理なことはやっぱりやらないほうがいい。身の丈にあった活動、事業そしてお金の負担のし合いも無理なくできることから実践していきました。

仲間と想いを出し合う「合意形成」

私が最初に言いだしっぺで呼びかけをしたんですけれど、この「なんとかしたい」「なんとか変えていきたい」という想いは一人の力では何もできません。仲間が要る。それに協賛する、想いを共有できる仲間をつくっていかなくてはいけない。そして本音で一人ひとりの想いを出し合い、出し合った意見、想いを一つの形にするという作業が私達の活動そのものなのです。それがいわゆる合意形成ですね。市民、仲間との合意形成です。いろんな課題、いろんな想いをみんなが本音で話し合う中で、「そうだよね」という確認と意志の共有をすることによって一つの目標に向かうことができるはずです。また、それを実感してきたわけです。

そんな経験を重ねる中で、私達は、次の未来がどんな時代になるかということを日常生活のお手伝いの現場から学ばせて頂きました。それは行政あるいは制度の範疇のサービスから見えるものではないと思います。では、その予測される不安の解消、あるいはこうあったらいいのにという理想のために、私達に何ができるかということも活動の仲間達と一緒に共有し、実践してきました。

「豊かさ」や「安心」を大切にしていけば、新しい社会は必ずできる

話し合い、語り合う中で新しいサービス、事業に取り組むこともできたのだと思います。まだ任意団体でいる段階では、市民活動そのものが社会的な信頼をなかなか得られない状態の中で、拠点を持ち、いろんな経費がかかるのをどうすればいいか、知恵とアイデアを出しながら工夫してきました。最終的にはボランティアという形でみんなが連帯をしてきたわけです。この活動を続けていくうちに、私達のやっている活動、仕組みもいつか社会と接点が持てる時が来るという見通しと、少しずつ財政的なものも見えるようになり、なんとかなるよと思えるようにもなってきました。そして阪神淡路大震災以降、ボランティア活動の必要性、またボランティアの社会的な認知が浮上してきました。特定非営利活動推進法ができた時、私は「あぁ日本の社会も夢がもてるんだ、変わるんだ」と、やはり自分達が想い続ければ必

ずその想い続ける方向に向かっていけると確信しました。人間の豊かさ、人間の安心ということには普遍の真理がある。その普遍の真理を自分達が人間として大事にすれば新しい社会は必ずできると思いました。

ですから、自分達のやってきた経験を広くみなさんに知って頂く、またみなさんのところに届けることによって、仲間を増やし、地域の信頼と共に地域でお互いに支え合う、そんな仕組みができたらいいなと思いました。

当時考えた「介護の社会化」が制度として実現

自分達でできる地域づくり、まちづくり、夢づくりです。本当に平成 3 年に発足したときには、まだ法人ということも頭にありませんでした。また、介護の社会化ということも当時は声にもなかったものです。ただ先を予測することで必ずこれは必要なんだと、これは女性達だけの問題ではなく、家族だけの問題ではないということを暮らしの中で、あるいは日々のいろんな場の中で体験というのか、見てきたわけですね。必ずこれはなんらかの形で社会化していかなきゃいけないんじゃないかという、そんな想いがあって介護の社会化というものを自分は考えていたわけです。

それが平成 12 年に介護保険という形で制度ができました。また、今年度からは支援費という形で制度ができました。これらは社会で支え合う、あるいは制度としてフォローする仕組みです。そこに一人ひとりの生き方、また一人ひとりの権利、そういう全体的なものの保障が生まれるんじゃないかと私は考えていました。女性もあたりまえに一人の人間として生きていきたいという、発足当時の私の想い。そういう意味では時代と共にいろんなものが変わってくる、だから地域も変わっていかなきゃいけない。地域も今までの仕組みそのものにこだわるんではなくて、社会が変わっていく中で、個人の意識も変わっていく、価値観も変わっていくからいろいろなものが変化してあたりまえだというふうに考えてきました。

ボランティアの連帯でつくる新しい社会のルール

ゆいの会をスタートするときにまず、自発的な行動とそれに伴う個人の責任を皆がもっと持つ必要があると思いました。さらに個人が社会に対しての責任をもっと持つ必要があると感じてきました。それがボランティアの原点ではないかなと。ボランティアとしてのゆいの会の活動であり、ボランティアの連帯の中で達成できるものではないかなと思いました。

今まで市民が自発的に社会に参画して、それをなんらかのルールなり、実態として動かしていくという事実はなかったように思います。それが今、日本の社会にも新しい価値観として、これから地域社会の中で社会を構成する一つの柱として NPO が重要な役割を果たしていく存在になってきました。ボランティアの連帯でつくる新しい価値観、新しいルールが、社会全体にも通用するルールとして、これから地域社会の中で認められていくものだと思います。

情報選択も市民の責任のひとつ

それからみなさんもご承知の通り本当に情報が大変豊富になりました。そのうちどの情報が自分達に必要なのか、何が大事な情報なのかということが、一人ひとりの判断にかかってきているわけです。その選択自体がこれからの市民の責任でもあります。またそれが地域の方向性、社会の方向性をつくっていく一つの柱にもなっていきます。その情報を次の社会、あるいは夢の持てる社会につなげていくために、今、私たち市民活動をしている者達をはじめ市民が、選択、判断をしていかなきゃいけない。その選択、判断したものが、本当に次の新しい社会をつくる形になるのだと思います。

私も本当に現場で実践してきた人間です。現場でずっと動いてきていると、学識的な部分はもう完全に抜けておりますけれど、情報の選択をすることによって、限りない可能性と新しい社会というものが、いろんな形で見えてくるんですね。そんなところでボランティアの人間力が社会を変え、新しい社会をつくりだしていくと思います。また、一人ひとりの市民が地域の住民として、地域社会の自治力を養い、お互いに育ちあっていく、育んでいく地域であれば、すばらしい地域になっていくのではないかなと考えます。次に何をしようかとか、こんなことが見えてきた、あるいはこんなことが必要だよねという中に、いろんな夢をゆいの会でも語ってきました。語る中にいろいろなことが事業としても形になってきました。

想い続ければ必ず夢は実現する

また、法人格を得たこと、社会に認知される組織になったことも大きな夢の実現でした。「想い続ければ必ず夢は実現する」、そんな実感とともに一つひとつの事業、あるいは人とのつながり、ボランティア活動の大切さ、市民意識の大切さを想っています。こうあったらいいなという夢、こうしたいなという希望をいつも仲間内で語り続けることが、社会に新しい影響を生み出していくのではないかなと思います。

本当にいろんな問題がたくさん私達の日常に見えています。でもそれは住んでいる私達一人ひとりの責任と意志の持ち方、判断の仕方一つだと思います。それは単に地域だけの問題ではなく、また NPO だけで考えることでもなく、国民的にみんなが自分達のまち、自分達の国、そして地球における日本の社会が、どうあったらいいのか、子ども達にどういう社会を残したらいいのかということをみんなで共有し、あるいは確認できるものにしたいと思います。最終的にはまず大人、いろんな判断ができる一人ひとりが大事ではないかなと思っています。

第５回　マネジメント

講師　鵜飼宏成

５－１　事業名決定　ワークショップ

前回ワークの３つの方針からキーワードを抽出し(個人が付箋紙に記入)、グループで集約しながら事業名を決定しました。

５－２　事業概要　ワークショップ

続いてその事業の中で行う個別事業(サービスメニュー)を設定、想定される顧客とサービスの特徴を書き上げる作業を個人で行い、グループで集約しました。

５－３　活動計画　ワークショップ

事業実現のための具体的な業務を検討、これは大きく全社的業務と個別事業の二つに分かれます。

①　全社的業務　プロモーション活動等

②　個別事業　　担い手に関わること　道具　仕組みづくり等

それぞれに対し具体策を個人で考え付箋紙に記入、グループで集約しました。グループごとの成果は以下のとおです。

グループ	A
事業名	ほのぼのハウス
事業概要	行くと誰かに会える、ちょっと立ち寄れる地域の茶の間。地域の人が支えたり支えられたりしながら、世代を超えた交流の場を提供する
活動計画	①　行くたびに違う展示やメニューのある喫茶店を経営する ②　共育お楽しみコーナーで達人を掘り起こす

グループ	B
事業名	地域のお宝開拓事業
事業概要	子ども達に地域のつながりと文化を伝え、地域の情報交換や人材発掘もできるつどいのひろばを提供する
活動計画	①　地域何でも教室の開催 ②　お宝みがき工房の開催 ③　おしゃべりひろばの提供

グループ	C
事業名	良いモノ発見いきいき事業
事業概要	地域の良い人材を活かし、地域資源をうまく活用しながらまちを元気にする「知多の元気便」を販売する
活動計画	① 特産品の発見 ② 生産体制の確立 ③ 販売ルートの確立

グループ	D
事業名	ご近所おたすけ隊事業
事業概要	身近なところにたまり場を作り、人材バンクを持つ地域問題の解決隊を組織し、派遣していく
活動計画	① まちの井戸端づくり ② 地域問題の相談、おたすけマン紹介、派遣 ③ 地域通貨の発行

この日はもうひとつ連携先を考える活用資源のワークを予定していましたが､時間切れで次回に先送りしました。抽象的な グループ理念に基づき 具体策 を考えるという困難さがあったため、予定以上に時間がかかりました。

５－４　ふりかえりシート

今日の気づき

- 講師の説明を聞いても理解できないため動揺を感じ、あせる自分に気づいた。「事業」という言葉に対してかな？
- 思いを形にしていく準備作業の中で改めて「具体策のターゲット」を絞り込むことで「あれもこれも」という思いから、「私は何がしたいんだ？」と考え込んでしまった
- 採算性・事業性の概念を最初に説明してもらわないと、今後の検討が現実離れのものになってしまう。まだまだ事業の幅が広すぎるため、個別事業の一つに絞らないと、事業の具体的な検証ができないのでは？
- 具体化の難しさと楽しさ
- やりたいサービスメニューと顧客のニーズをどのようにテストするか？
- 顧客の心をつかむのは大変
- いざ計画段階になると難しい
- 事業のイメージが必要であった
- 企画書を作成するに当たり、段階が多すぎるかも。後から見直す作業として段階を多くするほうが、全体を通して見れるかな？
- だんだん具体的なWSになり、私の意識の低さにもどかしく、地域に帰ってもう一度周りを見つめてみたいと思った
- 地域で再生起業することはとっても難しいと感じました
- 具体化の過程で、前向きな要素よりも後ろ向きな要素が次々と頭に浮かんできてしまう

満足したこと

- いろいろな角度から「事業内容」の想いを聞く事ができ、どれも「そうか」と思うものばかりでした。やはり私は楽しいネーミングに関心を持ちました
- 2週目のメンバーで少し落ち着いて人の意見を聞く事ができたように思う。そして個性ある素敵な男性に囲まれて、気さくに声をかけていただきありがたい
- 対象者を絞る事は難しいが、広くすることでいろいろな事業が飛び出し、うれしかった
- 今日の起業の内容では、すぐダメになる事が理解できた
- 理想を述べることと計画を述べることが一緒になりやすいと思った
- 代理で来たのにあたたかく迎えていただいたこと
- マネジメントの導入部分を知れたこと
- 少しずつ具体的になっていく
- グループの人から知らない情報を聞けたこと
- 新しい事業を考えるのは楽しいことだとわかった。夢のある仕事ですね
- みなさんと協力できてよい話しも聞け、さらに気心が知れた

不満

- 皆さんから出てきた意見はまさしく行政が提供している事業とオーバーラップしており、行政本来の不出来が実感された
- 時間が足りない
- 活動計画を「完成する」ことに流れてしまい、やりたいメニューを出し切れていない
- 方向性が見出せなかった。具体化には道のりが長い？
- いいプラン、意見を出せなかった
- 最後まで具体策を練れなかった
- リーダーになって皆の意見をまとめることは大変だと思った
- なかなかアイデアが出ず、頭が固くなっていると気づいてしまった
- 今日は疲れていたので、思いが充分に出せなかった。次回はもう少し今までのことを勉強して参加したい
- 新しいアイデアが出てこない

「講師の説明を聞いても理解できないため動揺を感じ、あせる自分に気づいた。事業という言葉に対して かな？」「あれもこれもという想いから、私は何がしたいんだ？と考え込んでしまった」「採算性・事業性の概念を最初に説明してもらわないと、今後の 検討が現実離れ のものになってしまう」「活動計画を完成することに流れてしまい、やりたいメニューを出し切れていない」「最後まで具体策を練れなかった」「今日の起業の内容では、すぐダメになることが理解できた」などの不満の声が目立ちました。

一方、「新しい事業を考えるのは楽しいことだとわかった。夢のある仕事ですね」「具体化する中で自分の意識の低さにもどかしく、地域に帰ってもう一度周りをみつめてみたい と思った」「理想を述べることと計画を述べることが一緒になりやすいと思った」など、プラン作成のプロセスを楽しんだり、自分への問い直しをする受講生もありました。

第６回　事業プラン

講師　関戸美恵子

６－１　活用資源　ワークショップ

このワークでは本来活動計画を実行するために内部資源と外部資源 *の特定をするのですが、今回は出身母体の異なる受講者であるので、外部資源に限定し資源の発見と活用を考えることにしました。

個人ワークで活動計画が抱えている課題を付箋紙に記入。グループで深刻な課題を３つ決定。決定した課題に対して外部資源の特定と具体的な連携内容を協議して決めます。

その成果を記入して、4 つの事業計画表を完成しました。(44 ページから 47 ページ)

６－２　事業計画表の完成

6 回のセミナーを終え、事業計画表を完成した受講生は次のような感想を語り、講師の関戸さんからアドバイスを込めた激励のことばをいただきました。

Aグループ

「言葉一つ一つが大事、いいアイデアだと思うところはそれぞれのグループごとにあったように思います。ただ私自身が今 NPO 法人に携わっている立場からいくと、特に お金の面に関しての練り方が弱い かなと思います。現実化していくときの資金面での練り方がまだまだ私達のグループも含めてですが、とっても弱かったかなと思っています。」

Bグループ

「日ごろはこういうふうな考え方はあまりしないので、この表にあるように一つずつ、事業名、理念、背景、概要とか計画というのを、自分の頭の中でそれぞれ区分けして考えるということ。現実からずるずると考えている部分が多かったものを、特に 未来から現在を見る、要所解明というところ が今回ずいぶん勉強になりました。」

Cグループ

「うちのグループは途中まで、Bグループと同じ理念でやっていたんですが、できあがったものがえらく違うなと思って。それはみなさん 参加者の持っている経験とかですね、考え方で積み重ねていくと、いろんなものができるんだな と思いつつ。もうちょっと先程のお話にも出ましたけども事業性というものを詰められたら、よりよかったかなという感じがしました。」

---

*外部資源＝遊休施設　外部の人材　行政の施策　制度　補助金　助成金等、幅広く地域再生事業を有効に展開する上で活用できるもの

Dグループ

「前回欠席しまして、すとんと一回抜くとここまでたどり着くのにやはり1時間は要するかなというふうに思いました。この理念に関わってきて、180度違う展開というか、ああこういうふうに展開していくんだと実感しました。この地域再生イメージ、地域理念というところから最後の活用資源というところまでくる間に、だいぶイメージ的に飛んでるというところを実感したのですけれども。これもみなさんの能力とそれから未来に対する希望と、そういうものが全てこういうふうな形になったんだなということで、このプロセスはこのプロセスで評価できるものだなというふうに思いました。しかし資金源の面は、やっぱり一番考えなくちゃいけないし、私達に一番欠如していたと感じております。」

この事業計画の中で一つだけ、お金の詰めが甘いというのは、これはしょうがないことだと思うんですね。これから詰めていけばいいんですが、もう一つ抜けているのがあるんです。事業名はありますよね、理念がありますよね、背景がある、事業の中味、商品がある、もちろんそれによって地域がどうなるというビジョンがある、計画がある、資源がある、もちろん数値計画もあるんですけれども、もう一つ抜けているもの、本当はいるんだけれど、あえて書いてない。今回は作らなかった。何でしょう？

それはやる人なんです。できませんよね今回は。とりあえず集まったグループだもの。だから事業主の名前が書けてない。これから、この講座を終えてみなさんがそれぞれ地域に戻られて、今度この計画をお創りになるときは、事業主名に高々とご自分のお名前を書いて頂きたい。それから資金の話がずいぶん出たんですけど、やっぱりスポンサー、支援してくれる人が必要です。まあ昔のスポンサーといえば、金も出すし口も出すし、うっとおしい、自分の支配下におこうというへんなスポンサーがいっぱいいましたけど、今市民スポンサーというものがある。そのほか資金集めの手法として、債券、私募債、ですね、私が募集する債券、これは全然規制がありません。それから地元の小金を持った方々がポンと寄付とか、今息子も後継がないし、大きな家あるんだけど使ってください世のため人のためになるならば、っていうような、そういうスポンサーを見つけてくるということもあるのかなと思います。そうやって事業主の名前を書いて頂き、そして資金の調達源をいろんな工夫で探し、実現可能なあなたご自身の計画書を作ってみてください。

６－３　講評　生きる、暮らす、働くことをつなげる事業を

松下典子

動き出せばおのずと見えてくる

私もこの６日間の講座のプロセス、時間をご一緒させて頂く中で、自分達がやってきたことが一つひとつ、あーそうだったな、こんなこともあったな、みんなも気付いていることが一緒なんだということを本当に痛感しました。平成３年にゆいの会を立ち上げた時、一つ大きくみんなで共有したのが学習と実践でした。実践を通して、ただ実践するだけじゃなくて、それを振り返り、立ち止まって検証あるいは議論をする場をつくるという学習をしてきました。この学習のなかに、たぶんこのワークショップで要所解明とか、可能性の未来であったりする部分が、言葉にすればそういうことかもしれませんけれど、私たちは実践する中に、それをたぶん経験してきているんだと思いました。

ですから動き出せばおのずと見えてくるものがたくさんあると思うんですね。言葉で書いたり、あるいはみなさんで議論していることだけだと、なかなかその次が見えなかったり、見にくかったり難しいなと思ってしまうことが、拠点を持ったりあるいは仲間を持って話し合うそのプロセスの中にあたりまえのように次から次へと行動が生まれてくるのではないかなあと、自分達の活動を振り返りながら感じました。

自分のできることから一歩を

またこれまでのワークショップの中で思いましたのは、暮す、働くということがバラバラになっていることからいろんな問題がおきているということ。本当は一人ひとりが市民としてここの事業に参加する、一人ひとりが一方的に顧客であったり利用者であるだけではなく、いつ自分がどちらの立場になるかわからないという、生きる、暮す、働くということがつながりあっているところに、市民活動やこれからのコミュニティ再生の大事なもう一つのポイントがあるんじゃないかなと思います。お互い一人ひとりがどの立場になるかわからない、双方向で事業を組み立てていくということも、とても大事なことではないかなと思いました。

これから自分の地域に帰って自分に今、何ができるんだろうと、もう一度振り返ることから始めてください。みなさん達がこのワークショップで得たことを地域の仲間達と共有し、自分のできることから一歩を踏み出して頂けると本当に私たちも希望が持てます。これからこの講座、このワークショップの手法を使って地域をみんなでつくりあげていきたいと思います。皆さんのご活躍を期待しています。

事業名　ほのぼのハウス

プロジェクトメンバー　Aグループ

事業理念

ありのままの自分と他人を尊重できる人間関係の中で、自立した地域活動に支えられ、誰でも死ぬまで安心して、心豊かに暮らせる地域をつくりたい

事業背景

行政の資金が減り、市民活動に使えるお金も減るという悪循環から、家庭の経済的負担が大きくなる。さらに、地域の結びつきが減り、犯罪が増え、少子高齢化は更に進む。また、活動基盤が脆弱になったボランティアが、自然消滅する

地域再生イメージ

- 地域住民の活動により、川辺が花で一杯になるなど魅力ある地域環境となり、地域住民が住んでいる地域を好きになる。また、地域の魅力にひかれ、外からも人が集まり、地域経済が活発になる
- NPO、市民活動が活発になり、雇用の場が増えるとともに、各々が持つ能力を活かせる場が地域に増える
- 子育てに悩むお母さんか減少し、子供が健やかに育つ。一方、健康な高齢者の比率が増える
- 子供や障害者など誰もが住みやすいコミュニティが再生する

事業概要

（事業内容）

行くと誰かに会える、ちょっと立ち寄れる地域の茶の間。地域の人が支えたり、支えられたりしながら、年代、世代を超えた交流する場を提供します

1．喫茶

顧客　地域住民（地域の高齢者、子育てママ、障害者など誰でも）

特徴　広いスペース、バリアフリー、禁煙、安心、安い、手づくり菓子、料理が得意な人が作る

2．共育お楽しみコーナー

顧客　地域住民（地域の高齢者、子育てママ、障害者など誰でも）

特徴　地域の中から達人を掘り起こす

ミニギャラリー

．

活動計画

全社的活動

① 地域の人が自主的に活動するようにするための運営コーディネーター
② 賛同者を集め、寄付、出資金を集める
③ そこそこ大きい（広い）ところ

個別1．喫茶

① 行く度にちがう展示、メニュー
⇒展示コーディネーター
⇒お楽しみコーナーの人に利用してもらう
② メニューのレシピを用意する
③ 販売

個別2．共育お楽しみコーナー

① 達人を掘り起こす
⇒町内会、口コミ、総合学習の課題にしてもらう
② 喫茶店の奥のようなところ

活用資源

1．人、広報、メディア

課題　ミッションを共有した人の確保

方法　知人に頼む　広報にのせてもらう　ケーブルテレビに取材依頼

2．近所の空き店舗、スーパー、商店、保育園

課題　場所の確保

方法　交渉に行く（人が大事）

3．会員　助成金

課題　資金の確保

方法　会費を集める　助成金についての情報を集める

事業名　地域のお宝開拓事業

プロジェクトメンバー　Bグループ

事業理念

自然と文化を大切にし、支えあう元気な地域をつくりたい

事業背景

便利になりすぎたゆえに、人や自然に対して無関心でも暮らしてゆける社会となり、自然環境が悪化し、文明社会の崩壊が起きる

地域再生イメージ（地域利益）

- 昔ながらの文化や街並みを利用した活動をしていけば、観光資源となる
- 日本文化を継承していくため、異世代との交流が出来る場所がある
- 誰もが働く場と個人の能力を提供できる場が出来ている
- NPO が増えてくることによって、多種多様なサービスが安心して使えるようになる
- 地域ブランドのタマゴや梅、竹炭を全国へ発信する知多の元気便がある
- 竹炭を使って、川がきれいになり、メダカやホタルがすめる川になる
- 誰も（老人や子供、障害者など、誰でも）が働くことが出来る太陽ファームが出来る

事業概要

1、地域なんでも教室

顧客　子どもから高齢者まで

特徴　子供でも大人の先生になれる

2、お宝みがき工房

顧客　特技を持っている人

特徴　持っている技術をわからない人に対して伝え方を教える、サポートする

3、おしゃべり広場

顧客　悩みを持った人々

特徴　気軽におしゃべりしてスッキリする。もしかしたら解決するかも‥

4、お宝発掘団

顧客　地域の人

特徴　子どもが聞きにいく

子どもが地域に出てお宝をさがしにいく、情報を集めにいく

活動計画

全社的活動

① 地域の寄付
② 地域の行事と組んでお金を出してもらう
③ 助成会員の募集
④ 団体を会員制にして会費を集める
⑤ 行政、企業から空いている施設を提供してもらう（地域の空家）
⑥ PR 活動（学校、口コミ、回覧板、ポスティング、メール）

個別1. 地域なんでも教室

① 誰が講師となることができるか情報を集める（アンケート）
② ニーズ調査（アンケート）

個別2. お宝みがき工房

① 講師をサポートする人をさがす
② コーディネーター、マイスターを探す
③ 学校でお宝発掘団を PR して子供をとおして情報を集める

個別3. おしゃべり広場（情報交換の場）

① フリマ、バザー、なんでも教室の内容でイベントになるものを行う
② 広場の管理者（駄菓子屋のおばさんのような人）の確保

活用資源

1. コミュニティの資金

課題　財源の確保

方法　地域に還元できる事業を起業して資金を提供してもらう

2. 行政　企業の空施設

課題　活動場所の確保

方法　お互いにメリットのある事業計画を提示して協力してもらう

3. 各グループのリーダー

課題　仲間　会員を増やさなければ

方法　各グループに発表、活動の場所、情報交換の場所を提供することで、参加するメリットを理解してもらって会員になってもらう

事業名 良いモノ発見いきいき事業	**プロジェクトメンバー** Cグループ

事業理念
自然と文化を大切にし、支えあう元気な地域をつくりたい

事業背景
人々を取り巻く自然環境や社会に無関心な人が増え、自然を大切にする精神が失われ、地域に存在する文化が損なわれ、また、その地域の良いところ(人・モノなど)に気づく機会もない

地域再生イメージ(地域利益)
・ 昔ながらの文化や街並みを利用した活動をしていけば、観光資源(Ex.歴史散策ラリー)となる
・ 日本文化を継承していくため、異世代との交流が出来る場所(異世代交流プラザ)がある
・ 誰もが働く場と個人の能力を提供できる場(いきいき広場)が出来ている
・ NPO が増えてくることによって、多種多様なサービスが安心して使えるようになる(支援費制度の充実化・利用者の選択肢拡大化など)
・ 地域ブランドのタマゴや梅、竹炭を全国へ発信する知多の元気便がある
・ 竹炭を使って、川がきれいになり、メダカやホタルがすめる川になる
・ 誰も(老人や子供、障害者など、誰でも)が働くことが出来る太陽ファーム(農場)が出来る

事業概要

1.「知多の元気便」
顧客 地域に住む人々
特徴 地域の人々のつながりや関係性を重視した事業から生まれた知多地域生産限定品の販売

活動計画

全社的活動:「知多の元気便」(米と竹炭のセット販売)
① 米と竹炭や生産者などのデータベース作成
② 生産者と消費者が協力し、事業展開する組織・体制づくり

個別 1. 特産品の発見
① 米と竹炭の生産者を集め、協力して話し合う
② 米と竹炭や生産者などをデータ化し、データベース作成をする。

個別 2. 生産体制の確立
① 事業コーディネーターと生産者と共に米と竹炭を使った商品を考える
② 協力してくれる人々(生産者・消費者)を募るため、説明会などを開催する
③ 生産者・コーディネーター・消費者の協力の下、米と竹炭を生産する

個別 3. 販売ルートの確立
① 地域にある直売場を利用し、店頭販売を行う
② 商品を知ってもらえるよう広報し、また商品を使ったキャンペーンを展開する(ex. 子供の体験学習・竹炭の使い方アイデア大賞の公募など)
③ 多くの人々と交流や親交を深め、活動や理念に賛同してもらう

活用資源

1. シンクタンク・NPO など
課題 特産物である商品ニーズを把握したい
方法 商品開発をするために相談し、ニーズ調査をする

2. 宅急便 郵便局 生協
課題 流通ルートを確立したい
方法 コストの見積もりを出し交渉する

事業名 ご近所おたすけ隊事業

プロジェクトメンバー Dグループ

事業理念
自ら主体となり、人と心のつながりがあり、積極的な地域づくりの取り組みを通じて協力できる地域をつくる

事業背景
公的資金が減り、市民活動に使える資金も減る一方で、犯罪は増え少子高齢化はさらに進み、地域の結びつきが減っていく。ボランティアは自然消滅し、地域の課題は山積みとなり、家族・個人の負担が大きくなり、地域での安心な暮らしが脅かされていく

地域再生イメージ（地域利益）
市民グループが増え、子どもや高齢者・若者・障害者の活動が活発になり、そのネットワークのための地域コーディネーターが必要になり、定着する。遊休施設の有効利用などますます NPO などの活動が活性化する
- 筍のように NPO 活動ができてくる
- 子どもの社会活動の機会が増える
- 三世代交流の活動が多様化する
- まつり、集いなど若者主役の地域イベントが活発になる
- それらがネットワークを組むための拠点づくり、人づくりが進む

事業概要
1. まちの井戸端づくり

顧客　遊びたい、集いたい人
特徴　地域の人のさまざまな手づくりのものがサービスされる

2、相談、紹介、提供事業

顧客　悩みや困った事のある人々
特徴　公共の相談窓口などに出向けない人を積極的にお助けする

3. 人材サービス交換事業

顧客　支援の必要な人
特徴　地域資源の発掘と地域通貨発行

活動計画
全社的活動：　組織づくり
人材発掘と育成、資金・拠点調達、情報収集、PR

個別 1.　まちの井戸端づくり事業
① リサイクルショップ
② 井戸端文庫
③ 掲示板
④ 伝統文化を伝える講座
⑤ 伝承遊びの会

個別 2.　相談、紹介、提供事業
① いつでもそこに居て、ゆっくり話を聞いてあげられる「ご隠居さん」の何でも相談
② お助けマン派遣

個別 3.　人材サービス交換事業
① お助けチケットの発行

活用資源
1. 会費

課題　活動資金の確保
方法　おたすけチケットのシステムづくり

2. メディア・回覧版・ちらし・HP

課題　地元住民、各機関の理解と協力を求める
方法　会員を集め、活動を PR する

3. 空家

課題　拠点の確保
方法　口コミとちらしで探す

受講者のふりかえり

第6回のふりかえりシートから

今日の気づき

- 受講者それぞれが問題点を持って来られているのだということ
- 新しいことを産み出すのはやはり大変
- 活用資源のところでもっと時間をかけて話し合えるとよかった
- 何をするにも多くの仲間が必要だなあ
- 「ほのぼのハウス」はかなり現実感のあるプロジェクトだったが、時間不足からツメきれなかった
- 前講座を休んだので理解するのに時間がかかった
- 事業がひとつの形になりました
- 先週の事を忘れている自分。活動資源がこれでいいのかなと思いながら
- 今まで時間が足りなかった
- 資金・場所・PR・人材の必要性をとても感じた
- 資金の確保の難しさ
- 甘い考えでも時と人によって成長していくものなんだ
- 一回欠席のブランクはかなりきつい
- 休むとわからなくなる。休んではいけない
- 経営(資金)面の弱さ
- 方向性を持って話をする事が重要
- イメージと事業立ち上げの間の大きなカベの存在
- 最初からのつながりの浅い部分があるかも。回数、期間が長いことからくるものか

満足したこと

- 地域に根づいた活動が大事と皆が気づいている
- 最後まで参加した参加者が多かったこと
- 一回欠席してしまったが最後まで楽しく参加できてよかった
- 活動や考え方など若い方たちのエネルギーをもらった
- 事業を始めるには考えがまだ甘いと思った
- ワークショップがいい機会になった
- 素敵な研修に無料で参加できて感謝！自分の苦手分野「事業」ということばを形にしたいと改めて思い、少し急いで行動したいとも思いました
- 68 歳の私は帰って一応復習してたが、再々復習できたのでよかった
- 4グループそれぞれのワークショップの結果が出てとてもすばらしい事に満足した

- ワークショップを体験できたこと
- 地域再生プランが完成したこと
- 全く新しい展開をした結果が出た意外性
- 資金調達の具体的な方法が聞けてよかった
- いろいろな人のアイデアを聞く事ができたこと

不満に思ったこと

- 知多市の人がグループのほとんどで、話についていけなかったこと
- 事業を詰め切れなかったこと
- 時間が足りなかった
- 3回もお休みしたことが残念だった
- 全体的にもう少し時間がほしかった
- スタート時にセミナーのレジュメをある程度把握したかった
- 事業開始には程遠い結論しか出せなかった
- 同じ部屋で数グループがワークショップをしたので、グループとしてのまとまりが少し薄かった

セミナー全体を通して

- 理念から作る作業はとても難しいけど楽しい
- 理念が特に大切。参加者で共有できていないと議論がちぐはぐになってしまう
- ワークショップに慣れていないせいかうまく乗れない時もあった
- 軽い気持ちで参加したが毎回楽しくて参加できてよかった
- 全日程に出席できず、かなりハードでした
- 受講生はみなさん活発でやる気が充分あるようだった
- ワークショップがあまりにシステマティックで参加者の想いを聞く場がなく自由に発言する場面も相互の交流のため必要だと思った
- セミナーレポートがまとめられていてよかった
- 想いを同じくする人がこんなに身近にいることを心強く感じた
- 人と人とのつながり、意見の出し合いで新しい発見、感動をした。皆同じことを思っていると実感した
- いろいろなアイデアがあった。個々のバックグラウンドは大切
- 考えているだけではダメで、声に出していろいろな人にアドバイスをもらうことの大切さを知った
- 人にはそれぞれいろんな想いがあって、良い可能性があると思った
- 個々の人間性がセミナーの展開の中に反映されていた
- WSの目的を見失って話が進まないことが多くあった

- 表現する事の難しさをつくづく感じた。思いは同じでも表現次第で全く違ってしまう
- 講義とは異なり毎回苦労したが、最初の漠然とした思いがWSを積み重ねる事によってある程度具体的なイメージに作り上げる事ができよかった
- 各参加者の実際の活動や考えなどをわかっているともっと具体的な意見が出しやすかったかも
- それぞれの段階でヒントやアドバイスが欲しかった
- どのような人かはっきり知らない人なのに楽しくできたので、これを機会にOB会でもいかが？

明日からのあなたに活かしたいこと

- どんな資源があるか探したい
- 課題共有の手法を職場で使ってみたい
- 何をするにもしっかりした理念が必要な事。具体的に動かすには順序を踏まえ考えていく行程が必要だということ
- 友達の輪をもっともっと広げよう
- 各回のまとめを読み返しながら、いただけるアイデアを取り入れていきたい
- よく考えて地域に役立てば力になるよう心掛けたい
- 地元の福祉の課題に活かしたいと思っています
- 成り行き未来にはならぬよう心得て地域で活動したい。是非アドバイス下さい
- 町内またはコミュニティ・シルバー・パトロール隊を是非作りたい
- 地元で活動したい、すでにしている人への情報提供
- 希望のある未来を作り上げることを意識し続けること
- 未来から現在を見る事
- 「ほのぼのハウス」の事業概要。「ご近所お助け隊」のお助けマン派遣、お助けチケット
- 市民の方からの相談に対応する際に活かしたい

セミナー全プロセスを終えて、受講生は①想いを共有する人が多くいることに安心し、②その想いを声にする、③結果新たな人とのつながりで新たなアイデアを発見する、という「場から答えが生まれる」ワークショップの有効性を十分体感し、「人間のよさ体験」を深くしたようです(実線)。また、完成プランの未熟さの原因を「理念が共有できない」「目的を見失って話が進まない」ことや「参加者相互の交流を図る時間がとれなかった」ことにあると計画作成の初歩的な重要ポイントにも気付いています(破線)。

今後への意気込みとしては、「想いを形にするため急いで行動したい」「福祉の課題に活かす」「町内パトロール隊を作る」など地域の具体的活動を進めるとの声のほか、「成り行き未来にならぬよう」「希望のある未来を作り上げること」を意識し続けたい、と地域のありように果たす自分の役割を自覚する声も上がりました(二重線)。

第４章

あなたの起業で地域を元気に！

１　「起業」だから「事業」「ビジネス」の視点

「私たちがデザインする地域づくり」のための本セミナーでは、地域ニーズや地域の課題を解決する事業を市民が立ち上げ、地域資源を活用しながら活動を展開する というコミュニティ・ビジネスの手法を学びました。

セミナーの観点の一つとして「『事業』の視点を持つ」を挙げましたが、このねらいを達成するために、自立し継続した活動運営を目的とした「活動計画」「資源活用」として第５回から具体化ワークを行っていきました。第４回までが理念やビジョンに関わるワークだったので、想いの共有による喜びや各自の地域を見直す契機となるなど受講生の気づきとしては肯定的なものが目立ちましたが、第５回・６回では否定的な気づきが増えました。

「講師の『事業』ということばが理解できないため動揺」「具体化に対して自分の意識が低くもどかしい」「後ろ向きな要素が次々頭に浮かんできてしまう」「今日の起業の内容ではすぐだめになる」「方向性が見出せない」「最後まで具体策を練れなかった」「アイデアが出ない」等。

そこで、コミュニティ・ビジネスについて理解を深めてもらうために「コミュニティビジネスの手法を使いながら、地域を元気にしていこう」というテーマのもと、２月７日にセミナー成果発表を兼ねた「あなたの起業で地域を元気に！フォーラム」を行いました。フォーラムでコーディネーターの関戸美恵子さんは次のようにコミュニティ・ビジネスの魅力と可能性を語りました。

２　コミュニティ・ビジネス

コミュニティ・ビジネスの３つの顔

① 地域づくりの顔

② 仕事起こしの顔

③ ビジネスの顔

この３つが複合して相互に補完しあったり、つながりあったり、影響しあったりしながら、総合的に人々の生き方や働き方、あるいは事業のあり方、地域のあり方を変えていく。この非常に息の長い、そしてダイナミックな動きを私たちは見ていかなくてはなりません。一つだけを見て、がっかりする必要はないし、あるいは一つだけを見てそこに幻想を持ってもいけない、本当に長い時間がかかります。

新しい地域を新しい手法で作り出そうとするならば、私たち一人ひとりが自分で発見した地域の課題と、自分の生き方、働き方を限りなく近づけて、そこで何かアクションを起こしていく ことです。コミュニティビジネスというのは、大きなミッションとプランの上に、具体的な行動がそこにあって、初めて動き出すものです。

３　たじみコミュニティ・ビジネス

フォーラムでは、コミュニティ・ビジネスの先行事例報告者として岐阜県多治見市の子育てママのリフレッシュプレイス「Mama's Cafe」を運営する山本博子さんと、「Mama's Cafe」をはじめ市民出資のコミュニティタクシー等地域で支えあい、雇用創出につながる事業を次々に産み出した関谷剛一さんを招きました。地域の課題解決に向かう意志と自分の生き方や働き方が重なり合ったときに、人はどのぐらい生き生きと輝くのか、また本当に喜びと意欲を持ってその事業に取り組んだとき、そこにどんな困難があっても、その事業がどんなにささやかであっても、こんなにも地域が変わっていくのだということをたっぷり語ってもらいました。

「Mama's Cafe」山本博子さん

立ち上げ経緯

関東から嫁ぎ「ママ友達が欲しいな」

⇩

子どもと一緒に遊ぶ親子のサークルを立ち上げ

遊ぶだけじゃ満足できない

⇩

関谷さんに会い「20代30代のあなたたちぐらいの主婦層がリサイクルショップに来る、そういう面白いアイデアはないか？」

⇩

子どもと一緒に来店できるカフェをリサイクルショップに併設することによって、新たな客層が加わるのでは？と提案

⇩

「子育てママのリフレッシュプレイス」をコンセプトに子どものフリースペース、遊び場がある喫茶店を運営

しかし水商売なので、なかなか経営が困難。17人のスタッフに時給を払えるようにもっと柱を。

事業の３本柱

①「飲食業」　一番人気は手作りの月齢に応じた離乳食ランチ
②「物販業」　アウトレット子供服、ブランド子供服、手作り子供服、カントリー雑貨
③「お教室事業」　子連れで参加できる教室事業

お母さんたちの関わり方

女性が本人の望む関わり方で、無理なく社会参加して、生きがいを探求できる場

①「Mama's スタッフ」　カフェ運営
②「Mama's インストラクター」　ビーズなど教室事業の講師
③「Mama's スペシャリスト」　手づくり品委託販売
④「ハハズ」　子連れで働かないスタッフ
⑤「ババズ」　子どもの面倒を見に手伝いに来てくれるおばあちゃん世代

Mama's Cafe の成功要因

①　売り手と買い手が同一であることでニーズがわかる

ゆっくりと食事が出来ないわ

いつも手間かけて離乳食作ってるけど、たまには手抜きしたいなあ

→ 商品化

②　自立心
自分たちで稼いで、家賃払って、自分たちの給料を取っていく
儲からなかったら、時間給 200 円、100 円の時も

③　ターゲットの絞り込み
お母さん像をたった一人に絞る

朝 6 時に起きて・・・20 代でそこそこ美人でおしゃれで学歴もある・・・

その人が「Mama's cafe」に来たときに、「ああ、ほっとした」「また、明日からがんばって子育てやろう！」と思ってもらえる「商品とかサービスって何なんだ？」と考える。そのお母さんが「Mama's cafe」で「こんないいことがあったよ」と友達に言って、そのお母さんがまた別の友達にというふうに、ビリヤード方式で伝わっていって「Mama's」が地元に根ざしていく。多治見市で子育てしていて、「Mama's cafe」という面白いお店があるから「ちょっと子育てが楽しいんだ」と別の市町のお母さんに自慢話してくれたらいいなあ、と山本さんはビジョンを語っています。

また、「お母さん仲間は人材の宝庫だ」と実感しているそうです。いろんな能力を持った人たちが、経営難のなかでもどんどん人のネットワークを使って宣伝をしていき、新たなアイデアを出してくる。苦しい課題が山積みでも、いろんな人材がいて、意見を出し合い、そして必ず前へ進んでいくように常に新しいことに取り組んでいく。「Mama's cafe」の活動を通して、山本さんは 地域のお母さんたちの「ウーマンパワー」に開眼し、信頼でつなぐ新しい人間関係を築いていった と言えるでしょう。

「たじみコミュニティ・ビジネス・プロジェクト」関谷剛一さん

立ち上げ経緯

我が子が7ヶ月で障害者に →

多治見通運という会社に29歳で入って以来、やり手の経営者だった自分「力あるものが生き残り、努力するものが報われる。そうでない者は切り捨て」という生き方

←

「弱い者、小さい者をどうしたらいいのだ」「この子を切り捨てるわけにはいかない」「この子たちが生きていくためにはどうしたらいいのか」という視点へ

→

「共生」をテーマに地域で互いに助け合う仕組みを事業として

7つの事業を次々展開

① たじみ助け合いネット
② 地域通貨
③ リサイクルショップ「エコショップバザル」
④ 「Mama's cafe」
⑤ 便利屋「トーノーデリバリーサービス」
⑥ エルダーワーカーズ　民間版のシルバー人材センター　登録スタッフ40人
⑦ コミュニティタクシー　市民出資　売り手と買い手が一緒　しかし固定給で経営難

「自分と違う人をどれだけ受け入れるか？」ということを学んだ。その効率の悪さから「何が生み出せるか?」というふうにこだわれるようになった

コミュニティ・ビジネスの展望

もともとコミュニティビジネスは、「地域の問題を解決する」「困ったことを解決するのが仕事」であるため、事業としては限界があると関谷さんは言います。やっぱり最後は市民自治、政治の世界に入っていかざるを得ないと。市民の自治から変えない限り、問題解決は出来ないと結論付けています。

一方で市場主義・経済主義は行き過ぎてしまって、もう地方では太刀打ちできなくなっている。ではどうするか？「それはもしかたら、地域で互いに支え、自給自足する仕組みかもしれない。効率も悪くなるし、採算も悪くなる。でも、<u>採算と効率性の向こうにある第3の道、それを模索する</u>必要があるだろう。そのための種まきとして、自分のやってきた事業がある。結果よりもプロセスを楽しむ。そういう気持ちがない限り、続かない。」と結んでいます。さらに「<u>もう一度、わずらわしいかもしれないけど、隣の人と手を結び、つながっていく。そのわずらわしさを引き受けない限り、始まらない。それを信じて前へ進むしかない。</u>」と信頼でつながる新たな人間関係づくりを関谷さんは提言しています。

４　受講者のこれから

フォーラムでは、セミナー受講者によるパネルディスカッションが行われ、セミナーを通じて何を学び、何に気づき、これからそれぞれ職場や地域に戻って自分が何をしていくかについて語ってもらいました。

石井久子さん（知多市南粕谷）

私の一番変わったところは、このセミナーを受講して、自分が地域でできることはあるかな、と考える時間が増えたことです。おかげさまで、ますます野次馬根性が旺盛になってしまいました。

南粕谷コミュニティの学校開放の活動は今、いろいろなところで発表されていて、注目をされている地域なんですけど、これまでの歩みを思い出してみると、一言で言えば、急速に地域の住民たちの高齢化の悩みに、タイミングよく居場所を見つけられた、ということだと思います。南粕谷小学校というところは 20 年前には知多市で一番児童数を抱えていた小学校なんですが、今は知多市で一番少人数の小学校になって、昔 1 学年 5 クラスあったんですが、今は 1 学年 1 クラスという状況ですので、どんな寂しい小学校になっているかというのは想像していただけると思います。

多分学校の先生の数も減って、広い学校を管理するのはとても大変なことでしょうから、開放する学校側にとっても、開放を求める住民にとっても、うまくタイミングが合ったと思うんです。小学校の中に「生涯学習ルーム」が開放されていることで、たくさんの地域の方たちが学校に出入りするので、自然に小学生とのふれあいの場も生まれますし、図書室も今、ボランティアの方たちで運営されていますが、夏休みや冬休みなると、子供たちの利用者もあって、とても楽しい空間になっているようです。

まだまだ考えて、改善していく余地はあると思いますけど、セミナーの中で何回も耳にしたのが、「歩いていける場所にみんなが集まれるところがあるといいね」です。そういう意味で言えば、小学校に拠点があるというのは、理想的なことだと、私は思っております。

今、コミュニティルームを利用している方っていうのは、50 代 60 代が圧倒的に多いんですけれど、その人たちも 10 年経てば 60 代 70 代。となると、お茶飲みサロンみたいな場所もほしいねという声が出ているんですが、場所が学校だけに飲食物を持ち込むわけには行かなくて、別の場所も考慮中です。

山本和枝さん（東浦町）

私はこのセミナーを通して、いろんな人と関われて、とても勉強になりました。未来に危機を感じているのは私だけだ、とずっと思い込んでいたり、自分の意見を言う場所を探しながらいたんですけど、このセミナーを通して、同じような思いをしている人と出会え

て、「ああ、私だけじゃなかったんだ」とうれしくなりました。いろんな子育ての問題もたくさん今出てきている中で、この子育て支援をキーワードとして、地域で関われることは何かないかなあ、と考えることが出来ました。漠然と今まで「やりたいなあ」という思いだけで、空想・妄想の世界にいたんですが、具体的に焦点の絞込みができてきたかな、と今思っています。

皆さんと話す中で「地域で安心して子育てをしていきたい」、そういう広場みたいなものが歩いて行ける距離のところにあれば、親子が楽しく生活できる姿を地域の人にも覗いてもらえて、ニコニコ笑いかけてもらえるような地域があれば、本当に課題が解決していくのが見えてくる、っていう感じがしてきました。

おじいちゃんもおばあちゃんもハンディ持った人も若い人も、いろいろ集える場所っていうのが、セミナーのワークショップで「たまり場」という言葉で表現されていたと思うんですけど、「ああ、ホントだ」、そういうところで、私は子育てを通してそういう人たちと関わりたいなあと思い、それとはまったく別の切り口から関わりたい人もいて、その「たまり場」に通じるものがあったなあというのを、すごく心強く思っています。

また、私の課題は、自分の中の価値観の転換です。私にとっても、地域はとってもうるさくて、うっとうしい、という考え方が根強く自分の中にありました。人に頼らないでやりなさいとか、人に聞くことは恥ずかしいことだよ、という教育を受けてきた結果、やっぱりそういう考え方が自分を縛ってきたな、と思います。これからはもっと人に頼ってたずねるということを自分がしていけば、何かそこから突破口があるんじゃないかなあ。人を信じることが出来るんじゃないかなあ。まず隣の人に「おはよう」って声をかけたいなあ、と思っています。それが一番今私に求められていて、自分を解放していく元になるんじゃないかなあと思います。

山口　光さん（音羽町役場企画課）

音羽町は、ちょうど知多市の人口の 10 分の 1 ぐらい、人口 8500 弱人の小さな町です。隣に豊川市があったり、岡崎市という大きなまちがあるため、車で隣へ出かけることが便利な町です。昔からの歴史があり、東海道の赤坂宿が今の町の中心になっているんですけども、そういった資源等、いいものがあるのにまだなかなか活かせていない。ちょっと知多の方とは違って、NPO というものが町にはまだ一つもない状況で地域づくりが少し弱い町です。

今回、このセミナーに出席し「知多の元気便」というプランを作っていた時もそうなんですけども、やはりどこをコミュニティビジネスとして出していくかが難しいというのが実感です。特に要所解明を未来に立ってする、というのが難しかったというのが率直な意見です。

音羽町の職員であるということで、「知多の元気便」でなく、音羽町にある音羽米の PR や赤坂宿の観光ガイドなど、そういった活動をされている方たちと情報交換をしたり、事例紹介をすることが、地域づくりがあまり進んでいない音羽町の第一歩だと思っています。

また場の提供ということで言えば、4 地区の公民館事業を結構熱心にやっている現状があるので、そこを町民の方にうまく利用していただいて、そこから何か新しい動き、一歩でも前へ出ていただけるグループ、団体が出るといいなあと思います。

岩田光寿さん(知多市役所市民活動推進課)

高齢化率 14.4%の知多市は、昭和 40 年代後半に大きな区画整理で団地ができ、その頃に入居した年代が非常に多く、今後 10 年間に最も人口の多い部分が 65 歳を迎える、という状況が来ます。名古屋に近い、ベッドタウンという形で昼間人口の割合が非常に低いのですが、10 年後に皆さんが地元に帰ってくるということになると、コミュニティ活動の形骸化がいわれる中、地域のセーフティネットというか、地域でどうやったら安心して暮らせるかという点が課題となってきます。

それから行政においてよく言われる「縦型」をどうにかしないと、市民活動と協働するのが困難です。行政という組織が縦型ということは、公共施設も結局縦型で市民活動をする方が活用しようにもなかなか使いづらい。あるいは縦型の行政の下にコミュニティが連携していると、コミュニティの事業自体も縦型になってしまう。そういったところに横の糸を入れるところが何かないかな、というところが二つ目の課題でした。

この課題について考えたとき、一番元気なところは何かなあ、と思ったところコミュニティビジネスに関わっている人たち、この人たちに一番活力があったように見えたんですね。そういった手法で何か地域に出来ないかなあと考えたわけです。

それでこの事業に参加して思ったのは、多様な意見を尊重するだとか、過程を楽しむということがあったんですけども、そのプロセスというのが一番重要だということです。今行政では多様化ということに対応できなくて、それが結局は目的を絞ることが出来ない、つまりいろいろなことに対応していくことができない、と言われています。今回のセミナーでもいろいろな思いで、皆さんが集まりました。地域課題を解決する時に、そのいろいろな違いこそが一つの資源になるんじゃないかな、というふうに強く感じました。

それから想いは違っても、いろいろ考えていく過程でお互いに刺激しあい、また自分の想いに付加価値が付いていくような、プロセスが進化していくというのか、そういった過程が本当に市民活動には重要だな、と思いました。そういった想いと想いをつなげるような、「開放系のプロセス」というのか、そういったものを非常に重要だと思いました。

なぜ市民活動が大事なのかとよく聞かれるんですが、人は誰でも弱者になる可能性があるんですよね。地域でそういった弱者の方の基本的人権を保障する仕組みづくり、まちづくりというのが、市民活動の底辺にはあると思います。いわば「地域のセーフティネット」。そういったところが市民活動が必要とされる所以であろうと個人的には思っています。

５　もうはじまっている、新たな起業物語

受講者の山本和枝さんは、東浦町で子育て支援を目的とした「たまり場」をつくる準備にはいっています。同じ想いをもつ人がいることに勇気づけられ、プラン作成の過程で漠然とした想いが明確になり、「セミナーで背中を押してもらった」と言います。

石井久子さんのフォーラムでの発言にも「お茶飲みサロン」、Ａ・Ｂ・Ｄグループのプランにも「ちょっと立ち寄れる地域の茶の間」「おしゃべりひろば」「まちの井戸端づくり」などが事業の一つとしてあがっています。手づくり品を販売したり、教室事業や喫茶があったり、さまざまな事業をそこに乗せながら、基本はやはり人がいる場所を作る「たまり場事業」。多治見の「Mama's Cafe」もまさに担い手がお母さんというたまり場事業そのものでした。人と人がふれあいながら、何か新しい力を生み出していく空間づくりです。このあたりは大変地味ではあるけれども、実はコミュニティビジネスの基礎作りなのです。こういうものが地域に張り巡らされていくことで、次の段階のもう少し大きな事業への土台を作ったり、岩田光寿さんの言う「地域のセーフティネット」にもつながっていくことでしょう。

フォーラム後、山本さんは仲間の加藤さんといっしょに、サポートちたの会員団体であるＮＰＯ法人生活支援センター「わたぼうし」（半田市花園町)の見学に出掛けました。学童保育と支援費による児童デイサービス、０歳からお年寄りまで利用できる夜間開所の３事業を行うＮＰＯです。午後３時ごろには、小学一年生と養護学校から帰宅した障害児童が同じ部屋で宿題をしたり、折り紙を折ったり、絵本を読んでもらったりしていました。「育ちの保障は、全ての子どもたちに与えられている権利。障害の有無や生活環境に関わらず、皆で育っていける場を目指し」学生ボランティアや若いスタッフに支えられ 2003 年 4 月から活動をスタートしています。最近では近所のお年寄りが今までの散歩道を変更し、「わたぼうし」の前で遊ぶ子ども達に声を掛けるようにもなったといい、地域の住民に好意的に迎え入れられています。

急激な少子高齢化や核家族化による家族力の衰退によって孤立しがちな「子ども」「障害者」「高齢者」を地域で同時にケアする視点は、小規模多機能なサービスの拠点づくりへとつながっていきます。「わたぼうし」のような世代交流をもたらす「たまり場事業」は、「共生する地域づくり」の核となることでしょう。

山本さんは保育士としての経験を生かし、まずは未就園の親子を対象に遊びの広場の提供や一時預かりを事業化する予定です。スタッフは遊びの見守りや悩みのあるお母さんの話し相手をするなど「本当の目的は大人の育ちあい」だと言います。拠点として、町から区へ管理を任されている旧保育園を利用させてもらうよう地域に働きかけてきました。「土日はボーイスカウトが使っているので、空いている平日の利用をお願いしています。駐車場がないなどの難点もありますが、ここなら本当に地域の人が集まりやすいから。」同時に、事業を立ち上げる仲間たちと夢を語り合う時間を大切にしながら、「親子で訪れるもう一つの『実家』」をコンセプトに山本さんの起業物語はもう始まっています。

第５章

協働＝新たな公共づくりのために

１　明るい未来を創る市民の意思

社会は急速に大きく変わろうとしています。にもかかわらず、現実の日常のくらしは何事も変わらず過ぎています。物に恵まれ、機能的で便利なくらし。必要な情報は瞬時に得られ、話したいときにはいつでもどこでも誰とでも電話でつながることができる毎日。ますます、人々の顔の見える関係は狭くなり、「困ったときはお互いさま」で支えあう地域の結びつきは衰退していきます。これが、私たちの求めてきた豊かさなのでしょうか。

今回、この「地域再生起業プランセミナー」は、私たち市民に限りない可能性と明るい未来を創る意思があることを確認する機会になりました。それは、「可能的未来」を阻むものを未来から現在を見る視点で解明し、それにどう対処していくかという方策のプロセスデザインに沿って、受講者が互いの想いを確認しあい、夢を描くことのできる未来イメージに向かって計画を立てていく中で見えて来たことでした。

また「人、もの、かね、情報」という地域資源を活用しながら事業を創造していくことを学ぶ過程で、「自分の住む地域を知らないかも」「地域に帰ってもう一度周りをみつめてみたい」など、受講者自身が自分の足元を振り返る契機ともなりました。

さらにもっと大切なことは、ワークショップの体験から「何人かで考えると想いが膨らむ」「思いがけないものができる」など、「新たな人とのつながりで新たなアイデアを発見していく」可能性を実感できたことです。「わずらわしいかもしれないけど、もう一度隣の人と手を結ぶ」と言った関谷さんの言葉通り、人間として当たり前な「人とつながりあって生きていることの大切さ」を学んできたことが、地域再生の原点です。

２　人々がつながりあう新しい関係づくり

バラバラになっている人の想い、意思をつなぐために今必要なものは何でしょうか？「地域再生」のテーマのもとに人が集まり、一人ひとりが地域の課題や想い、考えを自由に発言しあった「人との出会い」。日常を振り返りそれぞれの想いや考えの違いを「共有する空間」。それぞれの違いを認めつつ新たなアイデアを創造し、明るい未来を「共有していく時間」。この３つが整えば、地域の人間関係の再構築は可能です。

知多半島を核に県下につながるＮＰＯの代表たちは、課題解決への強い想いと、こうありたいと描く社会像から、それぞれのテーマ型コミュニティを創設してきました。そこに共感する人々が集い、語り合い、力を出し合い組織を発展させ、さらにネットワークを組むことで、ソーシャル・キャピタル（社会的なつながりとそこから生まれる規範・信頼）を育んできたのです。「知多に来ると元気になる！」ＮＰＯ・ボランティア情報ひろばに来る人の多くがこう語ります。人々の響き合う連帯とエネルギーがまた、想いのある人を勇気づけ、新しい活動を生み出していく好循環を作っています。

３　行動する市民が地域を元気にしていく

これからの少子高齢社会を、誰もが自分らしく生きる事ができる社会にすることは、後世につなぐ私たちの役割であり、今を生きている私たち市民の責任でもあります。世代を超え、共有できる地域づくりについて「今、私は何ができるのか」を考える時です。自発的な市民が動かない限り、それぞれの地域にふさわしい、市民の望む豊かさ、安心は得られません。社会を変えていく力は、市民の意思と人々がつながりあう新しい関係づくりから始まります。

新しい地域づくりは始まったばかり。気づいた人たちがつながりあって、地域の実情に合った安心づくり、仕事づくりを実践するためのモデルとして、このセミナーが有効に活用されることを期待します。

サポートちた宣言

特定非営利活動法人地域福祉サポートちたは、誰もが住み慣れた地域で、自分らしく生き、心豊かに幸せに暮らしていける地域づくりを目指しています。

私たちは地域に住む市民として、ＮＰＯで活動する仲間として、ともにまちを育て、人と育ち合う、そんな存在でありたいと思っています。

私たちも、市民一人ひとりの可能性を信じ、「行動する市民」が新しい活力を生みだし、地域を元気にしていくという新たな公共づくりのために、行政とともにさらなる努力を重ねてまいりますことをここに宣言します。

参　考　資　料

参考資料１

平成１５年度 地域づくり協働支援事業の実施状況

○市町村への地域課題募集　　　　　４月１６日～５月９日

○地域課題の選定　　　　　　　　　５月２３日

・豊橋市課題：河川流域が一体となった水源涵養活動の推進

・知多市課題：地域社会貢献事業の開発による地域コミュニティの活性化

※地域課題の詳細については、別紙「地域課題の概要」参照

○企画案の募集（公募）　　　　　　６月６日～７月４日

○選定委員会による委託団体の決定　　７月２２日

・豊橋市課題：特定非営利活動法人穂の国森づくりの会を委託団体に決定

・知多市課題：特定非営利活動法人地域福祉サポートちたを委託団体に決定

○委託団体との契約

・特定非営利活動法人地域福祉サポートちた：８月１３日

・特定非営利活動法人穂の国森づくりの会：８月２８日

○セミナー参加者募集

・特定非営利活動法人地域福祉サポートちた：契約日以後～原則９月１０日

（セミナー名：地域再生起業プランセミナー）

・特定非営利活動法人穂の国森づくりの会：契約日以後～原則９月２２日

（セミナー名："森と水を考える" 地域づくりセミナー）

○セミナー開催

・特定非営利活動法人地域福祉サポートちたが「地域再生起業プランセミナー」を９月２７日～１１月３０日の間に６回開催

・特定非営利活動法人穂の国森づくりの会が「"森と水を考える" 地域づくりセミナー」を１０月１１日～１月１７日の間に８回開催

○発表会の開催

・特定非営利活動法人地域福祉サポートちたが「あなたの起業で地域を元気に！フォーラム」を２月７日に開催

・特定非営利活動法人穂の国森づくりの会が「"森と水を考える" 地域づくりシンポジウム」を２月１４日に開催

参考資料２

地域課題の概要

＜豊橋市課題＞

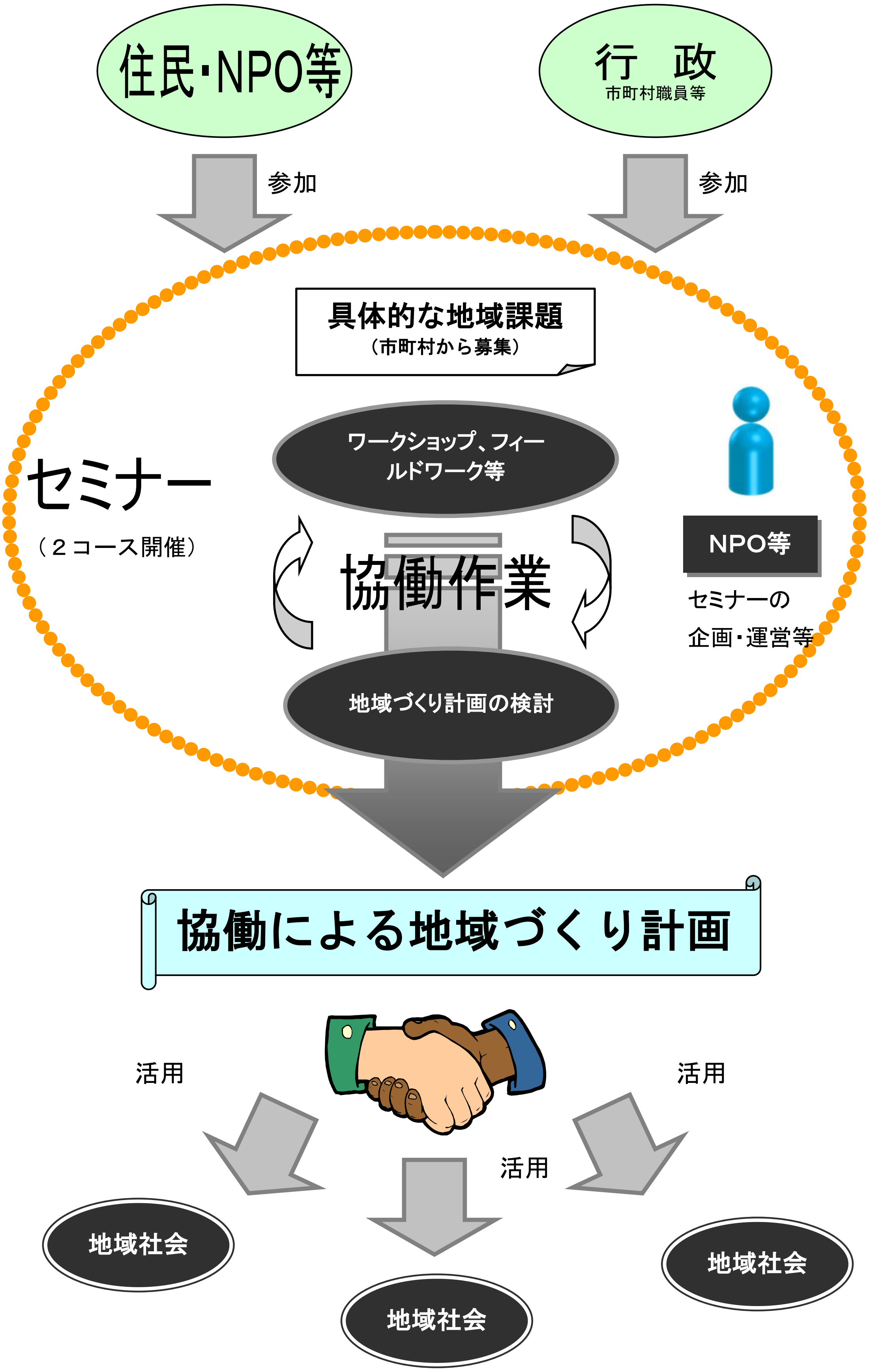
テーマ	河川流域が一体となった水源かん養活動の推進
課 題 の 概 要	限られた水資源の有効利用については、節水及び水源林の保護・育成について、地域住民一体となった取り組みが必要である。 これを促進するには上下流の相互理解と住民全体の水に対する意識啓発についての意識を醸成しなければならない。
過 去 の 経 緯 等	・豊川水源基金による水源林対策事業の実施 ・「水源地を巡る旅」による下流住民の水源地域理解 ・「広報とよはし」に水に関する特集を掲載（2 ページ） （節水、森の機能、設楽ダムの概要など） ・豊橋みなとフェスティバル他へ水源地（設楽・鳳来）の子ども達を招待

＜知多市課題＞

テーマ	地域社会貢献事業の開発による地域コミュニティの活性化
課 題 の 概 要	昭和４０年代後半に始まった団地造成により急激に発展した本市では、転入世帯がほぼ同年代であったため、一気に高齢社会を迎えることが想定されている。それとともに、昼間人口が極端に少ないベッドタウンから新しい地域社会への転換を余儀なくされ、様々な問題を生じつつある。こうした中で、地域を支える相互扶助組織の機能を担えるものとして、ＮＰＯ活動やコミュニティ活動などの地域社会に貢献する活動に期待がもたれているが、本市では自立した組織であるＮＰＯ法人の設立は数少なく、また、地域課題に主体的に取り組むコミュニティ活動も未成熟である。特に、コミュニティ活動は地域に基盤が置かれ、地域が本来持っていたセーフティーネットとしての役割の回復とともに、地域の経済的発展やいきがい創造を図る活動として、その活性化が求められている。
過 去 の 経 緯 等	地域コミュニティでは高齢社会問題、環境保全、観光開発など様々な課題をもっている。コミュニティ活動は、地域課題の多様化に伴い、従来のふれあい型から問題解決型の運営に転換が図られてきたが、価値観の多様化や個の重視、少子化等による活動への参加が減少しつつあり、組織形態や活動のあり方に検討を要する時期を迎えている。 これまで、コミュニティでは健康づくりや生涯学習の推進事業などが主体的に実施されてきた実績はあるが、それぞれのコミュニティが組織の存在意義を示し、自立した特色ある活動を展開することが望まれる。

参考資料３

地域づくり協働支援事業イメージ



私たちがデザインする地域づくり　**地域再生起業プランセミナー報告書**

発行日　2004 年 3 月

発　行　愛知県企画振興部地域振興課

〒460-8501　名古屋市中区三の丸三丁目１番２号

電話：052-954-6094(ダイヤルイン)　ＦＡＸ：052-954-6906

ＵＲＬ：http://www.pref.aichi.jp/chiiki

Ｅ-mail：chiiki@pref.aichi.lg.jp

編　集　CFSC 特定非営利活動法人 地域福祉サポートちた

〒478-0047　愛知県知多市緑町 31-1　ＮＰＯ・ボランティア情報ひろば

電話：0562-33-1631　ＦＡＸ：0562-33-1743

ＵＲＬ：http://www.cfsc.npo-jp.net

Ｅ-mail：cfsc@npo-jp.net